

守護国家論

それおもんみれば、偶十方微塵三悪の身を脱れて、希に閻浮日本爪上の生を受く。また閻浮日域爪上の生を捨て、十方微塵三悪の身を受けんこと疑いなきものなり。

しかるに生を捨て悪趣に墮する縁、一にあらず。或は妻子眷属の哀憐に依り、或は殺生悪逆の重業に依り、或は国主と成りて民衆の歎きを知らざるに依り、或は法の邪正を知らざるに依り、或は悪師を信ずるに依る。この中においても、世間の善悪は眼前にあれば、愚人もこれを弁うべし。仏法の邪正・師の善悪においては、証果の聖人すらなこれを知らず。いわんや末代の凡夫においてをや。

しかのみならず仏日西山に隠れ、余光東域を照してよりこのかた、四依の慧燈は日に滅じ、三蔵の法流は月に濁る。実経に迷える論師は真理の月に雲を副え、権経に執する訳者は実経の珠を砕きて権経の石と成す。いかにいわんや震旦の人師の宗義その悞りなけんや。

いかにいわんや日本へんど辺土の末学、誤りは多く実はすくな少きものか。随つてその教を学する人数は竜鱗りゆうりんより多けれども、得道とくだうの者は鱗角りんかくよりも希まれなり。或はあらい権教けんきやうに依るが故に、或は時機不相応じきふそうおうの教きやうに依るが故に、或は凡聖ぼんしやうの教きやうを弁わきまえざるが故に、或はごんじつ権実けんじつ二教にきやうを弁わきまえざるが故に、或はおせ権教けんきやうをおせ謂いうに依るが故に、或は位いの高下こうげを知らざるが故なり。凡夫の習い、仏法ぶつぽうについて生死しやうじの業ごうを増すこと、その縁えん一いつにあらず。

中昔ちゆうしやく、邪智じやくちの上人じやうじんありて、末代まつたいの愚人ぐにんのために一切いっさいの宗義しゆぎを破して、選択集せんぢやくしゆじ一卷いつけんを造る。名なを鸞らん・綽しゃく・導りだうの三師さんしに仮かりて、一代いつたいを二門にもんに分わかち、実経じつきやうを録ろくしてごんじつ権経けんきやうに入れ、法華ほふわ・真言しんごんの直道ぢくたうを閉とじて、浄土三部じやうどさんぶの隘路あいろを開く。また浄土三部じやうどさんぶの義ぎにも順じゆんぜずして、ごんじつ権実けんじつのほつぽう謗法ぼうぽうを成なし、永く四聖ししやうの種しゆを断たじて、阿鼻あびの底そこに沈しづむべき僻見びやくけんなり。しかるに世人せじんのこれに順したがうこと、譬たとえば大風たいふうの小樹せうじゆの枝えだを吹ふくがごとく、門弟もんていのこの人を重おもんずること、天衆てんしゆの帝釈たいしやくを敬うやむに似たり。この悪義あくぎを破やぶらんがために、また多くの書あり。いわゆる浄土じゆど決義鈔けつぎしやう・彈だん選せん択ぢやく・摧さい邪じやく輪りん等とうなり。この書を造る人、皆碩德せきとくの名な一天いつてんに弥よるといへども、

恐らくはいまだ選択集謗法の根源を顕わさず。故に還つて悪法の流布を増す。譬えば、盛なる旱魃かんぼうの時に小雨しゅうりゅうを降らせば草木さいもく弥枯れ、兵者じゅうやを打つ刻ときに弱き兵を先にすれば強敵じやうてき倍力ばいりきを得るがごとし。予この事を歎く間、一卷の書を造りて選択集せんぢやくしゆうの謗法ほうほうの縁起えんぎを顕わし、名づけて守護国家論と号す。願わくは一切の道俗だうじやく、一時の世事せじを止めて永劫えいけつの善苗ぜんみょうを種うえよ。今経論きやうろんをもつて邪正じやくしやうを直す。信謗しんぼうは仏説ぶつせつに任せ、あえて自義じぎを存することなし。分ちて七門しちもんとなす。

一には如来の経きやう教きやうにおいて権実けんじつ二教にきやうを定むることを明かし、

二には正像末しやうまつの興廢きやうはいを明かし、

三には選択集せんぢやくしゆうの謗法ほうほうの縁起えんぎを明かし、

四には謗法の者を対治たいぢすべき証文しやうぶんを出すことを明かし、

五には善知識ぜんちしき並なひに真実まじつの法ぽうには値あい難がたきことを明かし、

六には法華ぽうわ・涅槃ねはんに依る行者ぎやうぢやの用心しゆしんを明かし、

七には問に随つて答を明かす。

大文の第一に、如来の経教において権実二教を定むることを明かさば、これにおいて四あり。

一には大部の經の次第を出して流類を撰することを明かし、

二には諸經の浅深を明かし、

三には大小乗を定むることを明かし、

四にはしばらく權を捨て實に就くべきことを明かす。

第一に、大部の經の次第を出して流類を撰することを明かさば、

問うて云く、仏、最初に何なる經を説きたもうや。

答えて云く。華嚴經なり。

問うて云く、その証如何。

答えて云く、六十華嚴經の離世間淨眼品に云く、「かくのごとく我れ聞く、一時、仏、
 摩竭提国寂滅道場にあつて始めて正覺を成ず」と。

法華經の序品に放光瑞の時、弥勒菩薩十方世界の諸仏の五時の次第を見る時、
 文殊師利菩薩に問うて云く、「また諸仏聖主師子、經典の微妙第一なるを演説したもう。その声清淨
 に柔軟の音を出して、諸の菩薩を教えたもうこと、無数億万なるを觀る」と。

また方便品に仏自ら初成道の時を説いて云く、「我始め道場に坐し、樹を觀じまた經行
 して、乃至、その時に諸の梵王及び諸の天帝釋・護世四天王及び大自在天並に余の諸
 の天衆・眷屬百千万、恭敬し合掌し礼して、我に轉法輪を請ず」と。

これらの説は法華經に華嚴經の時を指す文なり。故に華嚴經の第一に云く、「毘沙門天王
 略 月天子 略 日天子 略 釈提桓因 略 大梵 略 摩醯首羅 略」等と 已上。涅槃
 經に華嚴經の時を説いて云く、「既に成道し已つて梵天勸請すらく、ただ願わくは如来ま
 さに衆生のために広く甘露の門を開きたもうべし。乃至、梵王また言く、世尊、一切衆生

に凡そ三種あり。いわゆる利根・中根・鈍根なり。利根は能く受く。ただ願わくはために説きたまえ。仏言く、梵王諦かに聴け諦かに聴け、我今まさに一切衆生のために甘露の門を開くべし」と。また三十三に華嚴經の時を説いて云く、「十二部經の修多羅の中の微細の義を、我先に已に諸の菩薩のために説くが如し」と。かくのごときらの文、皆諸仏世に出たまいて、一切經の初めには必ず華嚴經を説きたまいし証文なり。

問うて云く、無量義經に云く、「初めに四諦を説き、乃至、次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」と。この文のごとくんば、般若經の後に華嚴經を説けり。相違如何。

答えて云く、浅深の次第なるか、或は後分の華嚴經なるか。法華經の方便品に一代の次第浅深を列ねて云く、「余乗 華嚴經なり のもしは二 般若經なり、もしは三 方等經なり あることなし」と。この意なり。

問うて云く、華嚴經の次に何れの經を説きたもうや。

答えて云く、阿含經を説きたもうなり。

問うて云く、何をもつてこれを知るや。

答えて云く、法華經の序品じよほんに華嚴經の次の經を説いて云く、「もし人、苦くに遭あうて老病死らうびょうしを厭いとうには、ために涅槃ねはんを説く」と。方便品ほうべんほんに云く、「即ち波羅奈はらなに趣おもむき、乃至ないし、五比丘ごびくのために説く」と。涅槃經に華嚴經の次の經を定めて云く、「即ち波羅奈国はらなにおいて、正法輪しやうぼんりんを転じて、中道ちゆうだうを宣説せんせつす」と。これらの經文は、華嚴經より後に阿含經を説くなり。

問うて云く、阿含經の後に何れの經を説きたもうや。

答えて曰く、方等經ほうとうぎやうなり。

問うて云く、何をもつてこれを知るや。

答えて云く、無量義經むりやうぎぎやうに云く、「初めに四諦しだいを説き、乃至、次に方等十二部經を説く」と。涅槃經に云く、「修多羅しゆたらより方等ほうとうを出いだす」と。

問うて云く、方等とは天竺てんじくの語ご、これには大乘と云うなり。華嚴けごん・般若はんにか・法華ほつげ・涅槃等、皆大乘方等だいじやうほうとうなり。何ぞ独り方等部に限りて方等の名を立つるや。

答えて曰く、いわ實には華嚴・般若・法華等、皆方等なり。しかりといえども、今方等部において、別して方等の名を立つることは私の義わたしのにあらず。無量義經・涅槃經の文顯然もんけんねんなり。

阿含あこんは一向小乘いっじょうじょうなり。次に大乘を説く。方等より已後いご、皆大乘と云うといえども、大乘の始めなるが故に、初めに従したがいて方等部を方等と云うなり。例せば十八界の十半は色しきなりといえども、初めに従したがいて色境じきやうの名を立つるがごとし。

問うて曰く、方等部の諸經のちの後には、何れの經を説きたもうや。

答えて云く、般若經なり。

問うて曰く、何をもつてこれを知るや。

答えて曰く、涅槃經ねはんぎやうに云く、「方等ほうとうより般若ぼんげを出すだす」と。

問うて曰く、般若經の後には何れの經を説きたもうや。

答えて曰く、無量義經なり。

問うて曰く、何をもつてこれを知るや。

答えて曰く、仁王經にんのうきやうに云く、「二十九年中」と。無量義經むりやうぎきやうに云く、「四十余年」と。

問うて曰く、無量義經には般若經ぼんげきやうの後に華嚴經けわげんを列ね、涅槃經ねはんきやうには般若經ぼんげきやうの後に涅槃經ねはんきやうを列ぬ。今の所立しゆりつの次第は、般若經ぼんげきやうの後に無量義經むりやうぎきやうを列ぬ、相違いかにん如何。

答えて曰く、涅槃經ねはんきやう第十四の文もんを見るに、涅槃經ねはんきやう已前の諸經しよきやうを列ねて、涅槃經ねはんきやうに対して勝劣を論じて、法華經ほふわきやうを挙げず。第九の卷まきにおいて、法華經ほふわきやうは涅槃經ねはんきやうより已前いぜんなりとこれを定めたもう。法華經ほふわきやうの序品じよほんを見るに、無量義經むりやうぎきやうは法華經ほふわきやうの序分じよぶんなり。無量義經むりやうぎきやうには、般若の次に華嚴經けわげんを列ぬれども、華嚴經けわげんを初時おくに遣れば、般若經ぼんげきやうの後は無量義經むりやうぎきやうなり。問うて曰く、無量義經むりやうぎきやうの後に何れの經きやうを説きたもうや。

答えて曰く、法華經ほふわきやうを説きたもうなり。問うて曰く、何をもつてこれを知るや。

答えて曰く、法華經ほふわきやうの序品じよほんに云く、「諸しよの菩薩ぼさつのために大乘經だいじやうきやうの無量義むりやうぎ、教菩薩法きやうぼさつほふ、仏所護念ぶつしよごねんと名づくるを説きたもう。仏この經きやうを説き已おひつて、結跏趺坐けつかふざし、無量義處むりやうぎしよ三昧さんまいに

入りたもう」と。

問うて曰く、法華經の後に何れの經を説きたもうや。

答えて曰く、普賢經を説きたもうなり。

問うて曰く、何をもつてこれを知るや。

答えて曰く、普賢經に云く、「却つて後三月、我まさに般涅槃すべし。乃至、如来、昔耆闍崛山

及び余の住处において、已に広く一実の道を分別す、今もこの処においてす」と。

問うて曰く、普賢經の後に何れの經を説きたもうや。

答えて曰く、涅槃經を説きたもうなり。

問うて曰く、何をもつてこれを知るや。

答えて曰く、普賢經に云く、「却つて後三月、我まさに般涅槃すべし」と。涅槃經三十に

云く、「如来、何が故ぞ二月に涅槃したもうや」と。また云く、「如来は初生・出家・成道

・転妙法輪、皆八日をもつてす。何ぞ仏の涅槃のみ独り十五日なるや」と。大部の經大概

かくのごとし。これより已外、諸の大小乗経は次第不定なり。或は阿含経より已後に華嚴経を説き、法華経より已後に方等・般若を説く。皆義類をもつてこれを収めて一処に置くべし。

第二に、諸経の浅深を明かさば、無量義経に云く、「初めに四諦 阿含 を説き、次に方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説き、菩薩の歴劫修行を宣説す」と。また云く、「四十余年にはいまだ眞実を顕わさず」と。また云く、「無量義経は尊にして過上なし」と。これらの文のごとくんば、四十余年の諸経は無量義経に劣ること疑いなきものなり。問うて曰く、密嚴経に云く、「一切の経の中に勝れたり」と。大雲経に云く、「諸経の転輪聖王なり」と。金光明経に云く、「諸経の中の王なり」と。これらの文を見るに、諸の大乗経の常の習いなり。何ぞ一文を瞻て、無量義経は四十余年の諸経に勝るといふや。

答えて云く、教主釈尊、もし諸経において互に勝劣を説かば、大小乗の差別・権実の不同

あるべからず。もし実に差別なきに、互に差別・浅深等を説かば、じようろん 諍論の根源・あくごう 悪業起罪の因縁なり。爾前の諸経の第一とは、縁に随いて不定なり。或はあらい 小乗の諸経に対して第一なりとす。或は報身の寿を説いて諸経の第一なりとす。或は俗諦・真諦・中諦等を説いて第一なりとす。一切の第一にあらず。今の無量義経のごときは、四十余年の諸経に対して第一なり。

問うて云く、法華経と無量義経と何れか勝れたるや。

答えて云く、法華経勝れたり。

問うて云く、何をもつてこれを知るや。

答えて云く、無量義経にはいまだ二乗作仏と久遠実成とを明かさず。故に法華経に嫌われて、今説の中に入るなり。

問うて云く、法華経と涅槃経と何れか勝れたるや。

答えて云く、法華経勝るるなり。

問うて曰く、何をもつてこれを知るや。

答えて曰く、涅槃經に自ら「如法華中」等と説いて、「更無所作」と云う。法華經に當説を指して「難信難解」と云わざるが故なり。

問うて云く、涅槃經の文を見るに、涅槃經已前をば皆邪見なりと云う、如何。

答えて云く、法華經は如来出世の本懐なる故に、「今は已に満足しぬ」、「今正しくこれそ

の時なり」、「然るに善男子、我実に成仏してより已來」等と説きたもう。ただし諸經の

勝劣においては、仏自ら「我が説く所の經典は無量千万億にして」と擧げ了つて、「已に

説き、今説き、當に説かん」等と説く時、多宝仏地より涌現して、「皆これ眞実なり」と

定め、分身の諸仏は舌相を梵天に付けたもう。かくのごとく、諸經と法華經との勝劣を定

め了んぬ。この外、釈迦如来一仏の所説なれば、先後の諸經に対して法華經の勝劣を論ず

べきにあらず。故に涅槃經に諸經を嫌う中に法華經を入れず。法華經は諸經に勝るる由、

これを顯わす故なり。ただし、邪見の文に至りては、法華經を覺知せざる一類の人、涅槃

經を聞いて悟りを得る故に、迦葉童子の自身並に所引を指して、涅槃經より已前を邪見等と云ふなり。經の勝劣を論ずるにはあらず。

第三に、大小乗を定むることを明かさば、

問うて曰く、大小乗の差別如何。

答えて云く、常途の説のときは、阿含部の諸經は小乗なり。華嚴・方等・般若・法華・涅槃等は大乘なり。或は六界を明かすは小乗、十界を明かすは大乘なり。その外法華經に對して実義を論ずる時、法華經より外の四十余年の諸の大乘經は皆小乗にして、法華經は大乘なり。

問うて云く、諸宗に亘りて我が拠るところの經を実大乘と謂い、余宗の拠るところの經を權大乘と云ふこと常の習いなり。末學においては是非定め難し。いまだ法華經に對して、諸の大乘經を小乗と稱することを聞知せず、証文如何。

答えて云く、宗宗の立義互に是非を論ず。なかんずく、末法において、世間・出世について非を先とし是を後とす。自らは是非を知らず、愚者の歎ずべきところなり。ただししばらく我等が智をもつて、四十余年の現文を見るに、この文を破る文なければ、人の是非を信用すべからざるなり。その上、法華經に對して、諸の大乗經を小乗と稱することは、自答を存すべきにあらず。法華經の方便品に云く、「仏は自ら大乘に住したまえり。乃至、自ら無上道大乘平等の法を証して、もし小乗をもつて化すること乃至一人においてもせば、我則ち慳貪に墮せん。此の事は為めて不可なり」と。この文の意は、法華經より外の諸經を皆小乗と説けるなり。また寿量品に云く、「小法を樂える」と。これらの文は、法華經より外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるなり。天台・妙樂の釈において、四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも、他師これを許すべからず。故にただ經文を出すなり。

第四に、しばらく權經を閣いて實經に就くことを明かさば、

問うて曰く、証文如何。

答えて曰く、十の証文あり。法華經に云く、「ただ樂つて大乘經典を受持して、乃至余經の一偈をも受けざれ」とこれ一。涅槃經に云く、「了義經に依つて不了義經に依らざれ」と四十余年を不了義經と云う。これ二。法華經に云く、「此の經は持ち難し、もし暫くも持つ者は、我即ち歡喜す、諸仏もまた然なり、かくのごときの人は諸仏の歎めたもうところなり、これ則ち勇猛なり、これ則ち精進なり、これを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」末代において四十余年の持戒なし。ただ法華經を持つを持戒となす。これ三。涅槃經に云く、「乘において緩なる者は、乃ち名づけて緩となす。戒において緩なる者をば名づけて緩とせず。菩薩摩訶薩、この大乘において心懈慢せずんば、これを奉戒と名づく。正法を護るがために、大乘の水をもつて自ら澡浴す。この故に菩薩破戒を現ずといえども、名づけて緩となさず」この文は法華經の戒を流通する文なり。これ四。法華經第四に云く、「妙法華經、乃至、皆これ真實なり」とこの文は多宝の証明なり。

これ五。法華經第八に普賢菩薩誓つて云く、「如来の滅後において、閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」とこれ六。法華經第七に云く、「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提において断絶せしむることなけん」と釈迦如来の誓いなり。これ七。法華經第四に多宝並に十方の諸仏来集の意趣を説いて云く、「法をして久しく住せしめんが故に、ここに来至したまえり」とこれ八。法華經第七に法華經を行ずる者の住処を説いて云く、「如来の滅後において、まさに一心に受持し読誦し解説し書写して、説の如く修行すべし。所在の国土に、乃至、もしくは経卷所住の処、もしくは園の中においても、もしくは林の中においても、もしくは樹の下においても、もしくは僧坊においても、もしくは白衣の舎にても、もしくは殿堂にあつても、もしくは山谷曠野にても、この中に皆塔を起てて供養すべし。所以は何ん。まさに知るべし、この処は即ちこれ道場なり。諸仏ここにおいて阿耨多羅三藐三菩提を得」とこれ九。法華經の流通たる涅槃經の第九に云く、「我が涅槃の後、正法いまだ滅せず、余の八十年、その時、この経閻浮提においてまさに広く流布

すべし。この時まさに諸の悪比丘あつて、この経を抄掠して分つて多分となし、よく
 正法の色・香・味・美を滅すべし。この諸の悪人、またかくのごとき經典を讀誦すといえ
 ども、如来の深密の要義を滅除して、世間の莊嚴の文飾無義の語を安置し、前を抄して後
 に著け、後を抄して前に著け、前後を中に著け、中を前後に著けん。まさに知るべし、か
 くのごとき諸の悪比丘はこれ魔の伴侶なり。乃至、譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるが
 ごとし。諸の悪比丘もまたかくのごとし。雑うるに世語をもつてし、この経を錯り定め、
 多くの衆生をして正説し正写し正取し尊重し讚歎し供養し恭敬することを得ざらしむ。
 この悪比丘は利養のための故に、この経を广泛宣传布すること能わず。分流すべき所少く
 して言つに足らざること、彼の牧牛の貧窮の女人の展転して乳を売るに、乃至、糜と成す
 に乳味なきがごとし。この大乘經典大涅槃經もまたかくのごとし。展転し薄淡にして気味
 あることなし。気味なしといえども、なお余經に勝ることこれ一千倍なること、彼の乳味
 の諸の苦味において千倍勝るとなすがごとし。何をもつての故に、この大乘經典大涅槃經

じく中道教と立つるといえども、また法華・涅槃は一類の一乗を説くが故に不了義経なり、
 深密経には五性各別ごしょうかくべつを存するが故に了義経と立つるなり。三論宗のごときは、二蔵にぞうを立て
 て一代いちだいを撰せんし、大乘において浅深を論ぜず。しかも般若経をもつて依憑えびようとなす。これらの
 諸宗の高祖、多分たぶんは四依しえの菩薩なるか。定めて所存しよぞんあらん。是非ぜひに及ばず。しかりといえ
 ども、自身の疑いを晴らさんがために、しばらく人師にんしの異解いげを闇さしおいて、諸宗の依憑えびようの経
 々を開き見るに、華嚴経は旧訳くやくは五十・六十、新訳しんやくは八十・四十なり。その中に法華・涅
 槃のごとく一代いちだい聖教しやうきやうを集めて方便となすの文なし。四乗を説くといえども、その中の仏
 乗において十界互具じつかいごこく・久遠実成くおんじつじやうを説かず。ただし人師にんしに至りて五教を立てて、先の四教
 に諸経を収めて華嚴経の方便となす。法相宗のごときは、三時教を立てる時、法華等をも
 つて深密経に同ずといえども、深密経五巻を開き見るに、全く法華等をもつて中道の内に
 入れず。三論宗のごときは、二蔵を立てる時、菩薩蔵において華嚴・法華等を収め般若経
 に同ずといえども、新訳の大般若経を開き見るに、全く大般若をもつて法華・涅槃に同ず

るの文なし。華嚴は頓教・法華は漸教等とは、人師の意樂にして仏説にあらざるなり。
 法華經のごときは、序分の無量義經に慥に「四十余年」の年限を挙げ、華嚴・方等・般
 若等の大部の諸經の題名を呼んで「未顕眞実」と定め、正宗の法華經に至りて一代の勝
 劣を定むる時、「我が所説の經典無量千萬億にして、已に説き今説き当に説かん」との金言
 を吐きて、「しかもその中において、この法華經は最もこれ難信難解なり」と説きたもう
 時、多宝如来地より涌出して、「妙法華經、皆是眞実」と証誠し、分身の諸仏は十方よ
 り尽く一処に集りて、舌を梵天に付けたもう。
 今この義をもつて、余推察を加うるに、唐土・日本に渡れるところの五千・七千余卷の諸
 經以外の、天竺・竜宮・四王天・過去の七仏等の諸經、並に阿難の未結集の經、十方世界
 の塵に同ずる諸經の勝劣・浅深・難易は掌中にあり。無量千萬億の中に、あに釈迦如来
 の所説の諸經漏るべきや。已説・今説・当説の年限に入らざる諸經これあるべきや。願わ
 くは末代の諸人、しばらく諸宗の高祖の弱文無義を闇いて、釈迦・多宝・十方の諸仏の

強文有義を信ずべし。いかにいわんや、諸宗の末学は偏執を先となし、末代の愚者は人師を本となして、経論を抛つ者に依憑すべきや。故に法華の流通たる双林最後の涅槃経に、
 仏迦葉童子菩薩に遺言して言く、「法に依つて人に依らざれ、義に依つて語に依らざれ、智に依つて識に依らざれ、了義経に依つて不了義経に依らざれ」と云云。

予、世間を見聞するに、自宗の人師をもつて三昧発得智慧第一と称すれども無徳の凡夫にして、実経に依つて法門を信ぜしめず、不了義の觀経等をもつて時機相應の教と称し、了義の法華・涅槃を闇いて、譏りて理深解微の失を付く。如来の遺言に背いて、人に依つて法に依らず、語に依つて義に依らず、識に依つて智に依らず、不了義経に依つて了義経に依らず、と談ずるにあらざや。請い願わくは心あらん人は思惟を加えよ。

如来の入滅はすでに二千二百余の星霜を送れり。文殊・迦葉・阿難、経を結集せし已後、四依の菩薩重ねて世に出で、論を造り経の意を申ぶ。末の論師に至りて漸く誤り出来ず。また訳者においても梵・漢未達の者あり。権教宿習の人は、実の経論の義を曲げて、権

の經論の義を存せり。これについてまた唐土の大師、過去の權教の宿習の故に、權の經論
 心に叶う間、實の經論を用いず。或は少し自義に違う文あれば、理を曲げて会通を構え、
 もつて自身の義に叶わしむ。たとい後に道理と念うといえども、或は名利に依り、或は檀
 那の歸依に依りて、權宗を捨てて実宗に入らず。世間の道俗また無智の故に、理非を弁
 えず。ただ人に依りて法に依らず。たとい惡法たりといえども、多人の邪義に随つて一人
 の實説に依らず。しかるに衆生の機多くは流轉に随い、たとい出離を求むるにも、また
 多分は權經に依る。ただ恨むらくは、惡業の身、善に付け惡に付け生死を離れ難きのみ。
 しかりといえども、今の世の一切の凡夫、たとい今生を損すといえども、上に出ずとこ
 ろの涅槃經第九の文に依つて、しばらく法華・涅槃を信ぜよ。その故は世間の淺事すら多
 く展轉する時は、虚は多く實は少なし。いわんや仏法の深義においてをや。如来の滅後
 二千余年の間、仏經に邪義を副え來り、万に一も正義なきか。一代の聖教多分は誤りあ
 るか。ゆえに、心地觀經の法爾無漏の種子、正法華經の屬累の經末、婆沙論の一十六字、

撰論の識を八、九に分つ、法華論と妙法華経との相違、涅槃論の法華は煩惱に汚さるの文、法相宗の定性無性の不成仏、撰論宗の法華経の二称南無の別時意趣、これらは皆訳者・人師の誤りなり。この外にまた四十余年の経経において多くの誤りあるか。たとい法華・涅槃において誤りあるも誤りなきも、四十余年の諸経を捨てて法華・涅槃に随うべし。その証は上に出し了んぬ。いわんや誤りある諸経において信心を致す者の生死を離るべきや。

大文の第二に、正像末に就いて仏法の興廢あることを明かさば、これに就いて二あり。一には、爾前四十余年の内の諸経と浄土三部経との末法における久住・不久住を明かし、二には、法華・涅槃と浄土三部経並に諸経との久住・不久住を明かす。

第一に、爾前四十余年の内の諸経と浄土三部経との末法における久住・不久住を明かさば、

問うて云く、如来の教法は大小・浅深・勝劣を論ぜず、ただ時機ときに依つてこれを行ぜば、定めて利益りやくあるべきなり。しかるに賢劫けんこう・大術だいじゆつ・大集等の諸経を見るに、仏の滅後二千年已後は仏法みな皆滅して、ただ教のみありて行・証あるべからず。随つて伝教大師の末法まつぽう灯明記とうみやうきを開くに、「我が延暦二十年辛巳えんりやく一千七百五十歳」と一説なり。延暦二十年より已後また四百五十余歳なり。すでに末法まつぽうに入れり。たとい教法ありといえども、行・証なけん。しかるにおいては、仏法を行ずる者、万が一も得道あり難がたきか。しかるに双観経そうくわんきやうの「当来とうらいの世、経道滅尽きやうだうめつじんせんに、我慈悲哀愍われじひあいみんをもつて、特ひとりこの経を留めて、止住せんこと百歳ならん。それ、衆生のこの経に値あうことあらん者は、意いの所願しよがんに随つて、皆得度たいてくすべし」等の文を見るに、釈迦如来一代の聖教しやうきやう皆滅尽して後、ただ特ひとり双観経の念仏のみを留めて、衆生を利益りやくすべし、と見え了んぬ。この意趣に依りて、ほぼ浄土家の諸師の釈を勧うるに、その意いなきにあらず。道綽だうてつ禅师は「当今末法たうこんまつぽうはこれ五濁ごてつ悪世あくせなり、ただ浄土の一門のみありて通入つうにゅうすべき路みちなり」と書し、善導ぜんどう和尚は「万年まんねんに三宝さんぼう滅し、この

經のみ住すること百年なり」と宣べ、慈恩大師は「末法万年に余經悉く滅し、弥陀の教利物偏に増す」と定め、日本国の叡山の先徳慧心僧都は、一代聖教の要文を集めて、末代の指南を教ゆる往生要集の序に云く、「それ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か帰せざる者あらん。ただし顯密の教法はその文にあらざ。事理の業因はその行これ多し。利智精進の人はいまだ難しとせず。予がごとき頑魯の者にあえてせんや」と。乃至、次下に云く、「なかんづく、念仏の教は多く末代の經道滅尽して後の濁惡の衆生を利用する計りなり」と。総じて諸宗の学者もこの旨を存すべし。殊に天台一宗の学者、誰かこの義に背くべけんや、如何。

答えて云く、爾前四十余年の經經は、各時機に随つて興廢あるが故に、多分は淨土三部經より已前に滅尽あるべきか。諸經においては多く三乘の現身得道を説く。故に末代においては現身得道の者これ少なり。十方の往生淨土は多く末代の機に蒙らしむ。これに就いて、西方極樂は娑婆隣近なるが故に、最下の淨土なるが故に、日輪東に出でて西に没す

るが故に、諸經に多くこれを勸む。随つて浄土の祖師のみ独りこの義を勸むるにあらず。天台・妙楽みょうらく等もまた爾前にぜんの經に依るの日は、しばらくこの筋あり。また独り人師のみにあらず、竜樹りゅうじゆ・天親てんじんもこの意あり。これ一義なり。また仁王經にんのう等のごときは、浄土の三部經よりなお久しく末法万年のちの後八千年住すべしと。故に爾前の諸經においては一定すべからず。

第二に、法華・涅槃と浄土三部經との久住・不久住を明かさば、問うて云く、法華・涅槃と浄土三部經と何れいずか先に滅すべきや。

答えて云く、法華・涅槃より已前に、浄土三部經は滅すべきなり。

問うて云く、何をもつてこれを知るや。

答えて云く、無量義經に四十余年だいぶの大部の諸經を挙げ了つて「未顕眞実みけんしんじつ」と云う。故に双そう觀經等かんぎやうの「特留此經とくるしきやう」の言は、皆方便ほうべんなり、虚妄こもつなり。華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんにや・觀經等そくしつの速疾

・歴劫りやくの往生・成仏は、無量義經の実義をもつてこれをかんが檢うるに、「無量無辺不可思議阿僧祇劫あそうぎしうを過ぐれども、終つひに無上菩提を成ずることを得ず。乃至ないし、險けわしき逕みちを行なくに留難るなん多きが故に」という經なり。往生・成仏俱ともに別時意趣べつじいしゆなり。大集だいじゆつ・双觀經等の住滅の先後は皆隨宜すいぎの一説なり。法華經に來きたらざる以前は、彼かの外道げどうの説に同じ。譬たとえば、江河かうがの大海たいかいに趣おもむかず、民・臣たみしんの大王たうわうに隨したがわざるがごとし。身を苦くるしめ行なを作なすとも、法華・涅槃ねはんに至いたらざれば、一分の利益なく、有因無果ういんむかの外道げどうなり。在世ざいせ・滅後俱ともに教ありて人なく、行うありて証しやうなきなり。諸木は枯るといへども松柏しょうはくは萎しまず、衆草は散るといへども鞠竹きくちくは変かぜず。法華經もまたかくのごとし。釈尊しやくそんの三説・多宝たふたうの証明しやうめい・諸仏しよぶつの舌相ぜつさう、偏ひとへに令しやう法ほふ久住きうじゆにあるが故なり。

問うて云く、諸經滅尽しよきやうめつじんの後、特ひとり法華經のみ留とどまるべき証文しやうもん如何いかん。

答えて云く、法華經の法師品ほふしやうひんに釈尊しやくそん自ら流通りゆうつうせしめて云く、「我所わが説せの經典きやうべんは無量千萬億なんしんなんげにして、已すでに説せき今説いませき当あたに説せかん。しかもその中ちゆうにおいて、この法華經最さいもこれ難信なんしん難解なんげ

なり」と云云。文の意は、一代五十年の已今当の三説において最も第一の経なり。八万聖教の中に殊に未来に留めんと欲して説きたまいしなり。故に次の品に、多宝如来は地より涌出し、分身の諸仏は十方より一处に來集し、釈迦如来は諸仏を御使として、八方四百万億那由佗の世界に充滿せる菩薩・二乘・人・天・八部等を責て云く、多宝如来並に十方の諸仏の涌出來集の意趣は、偏に令法久住のためなり。各三説の諸経滅尽の後、慥かに未来五濁の難信の世界において、この経を弘めんと誓言を立てよと。時に二万の菩薩、八十万億那由佗の菩薩、各誓状を立てて云く、「我身命を愛せず、ただ無上道を惜しむ」と。千世界の微塵の菩薩、文殊等皆誓つて云く、「我等仏の滅後において、乃至、当に広く此の経を説くべし」と云云。その後、仏十喻を挙げたもつ。その第一の喻は、川流江河をもつて四十余年の諸経に譬え、法華経をもつて大海に譬う。末代濁悪の無慚無愧の大早魃の時、四味の川流江河は竭るといへども、法華経の大海は減少せず等と説き了りて、次に正しく説いて云く、「我が滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して、断

絶せしむることなけん」と定め了んぬ。

つらつら文の次第を案ずるに、「我が滅度の後」の次の「後」の字は、四十余年の諸経滅尽の後の後の字なり。故に法華経の流通たる涅槃経に云く、「まさに無上の仏法をもつて諸の菩薩に付すべし。諸の菩薩は善能問答するをもつてなり。かくのごときの法宝はすなわち久住することを得て、無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」と已上。かくのごときらの文は、法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆべからざる経なり。この義を知らざる世間の学者は、大集権門の五五百歳の文をもつてこの経に同じ、浄土三部経より已前に滅尽すべしと存せる立義は、一經先後の起尽を忘れたるなり。

問うて云く、上に挙ぐるところの曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師、皆法華・真言等の諸経において末代不相応の積を作る。これに依りて源空並に所化の弟子、法華・真言等をもつて雑行と立て、難行道と疎み、行者をば群賊・悪衆・悪見の人等と罵り、或は祖父の履に類し 聖光房の語、或は絃歌等にも劣る 南無房の語 と云う。その意趣を尋ぬ

れば、偏に時機不相応の義を存するが故なり。これらの人師の釈を如何にこれを会すべきや。

答えて云く、釈迦如来一代五十年の説教、一仏の金言において権実二教を分け、権経を捨てて実経に入らしむる仏語顯然たり。ここにおいて、「もしただ仏乗を讃げば、衆生は苦に没在せん」の道理を恐れ、しばらく四十二年の権経を説くといえども、「もし小乗をもつて化すること、乃至一人においてもせば、我すなわち慳貪に墮せん」の失を脱れんがために、「大乘に入るにこれ本なり」の義を存し、本意を遂げて法華経を説きたもう。しかるに涅槃経に至りて、「我滅度せば必ず四依を出して、権実二教を弘通せしめん」と約束し了んぬ。故に竜樹菩薩は如来の滅後八百年に出世して、十住毘婆沙等の権論を造りて華嚴・方等・般若等の意を宣べ、大論を造りて般若・法華の差別を分つ。天親菩薩は如来の滅後九百年に出世して、俱舍論を造りて小乗の意を宣べ、唯識論を造りて方等部の意を宣べ、最後に仏性論を造りて法華・涅槃の意を宣べ、了教・不了教を分ちて、あえて仏

の遺言に違わず。末の論師並に訳者の時に至りては、一向権経に執するが故に、実経を会して権経に入れ、権実雑乱の失出来せり。また人師の時に至りては、各依憑の経をもつて本となすが故に、余経をもつて権経となす。これよりいよいよ仏意に背く。

しかるに浄土の三師においては、鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依りて難易・聖浄の二道を立て。もし本論に違いて、法華・真言等をもつて難易の内に入るれば、信用に及ばず。

随つて浄土論註並に安樂集を見るに、多分は本論の意に違わず。善導和尚はまた浄土三部経に依りて、弥陀称名等の一行一願の往生を立てる時、梁・陳・隋・唐の四代の撰論師、総じて一代聖教をもつて別時意趣と定む。善導和尚の存念に違えるが故に、撰論師を破する時、彼の人を群賊等に譬う。順次往生の功德を賊するが故に、その所行を雑行と称す。必ず万行をもつて往生の素懐を遂ぐる故をば、この人初むる故に「千中無一」と嫌えり。この故に善導和尚も雑行の言の中に、あえて法華・真言等を入れず。

日本国の源信僧都はまた叡山第十八代の座主慈慧大師の御弟子なり。多くの書を造れども

皆法華を弘めんがためなり。しかるに往生要集を造るの意は、爾前四十余年の諸經において往生・成仏の二義あり。成仏の難行に対して往生易行の義を存し、往生の業の中心において菩提心・觀念の念仏をもつて最上となす。故に大文第十の問答料簡の中、第七の諸行勝劣門においては、念仏をもつて最勝となす。次下に爾前最勝の念仏をもつて、法華經の一念信解の功德に対して勝劣を判ずる時、一念信解の功德は念仏三昧より勝ると百千万倍なりと定めたまえり。まさに知るべし、往生要集の意は、爾前最上の念仏をもつて法華最下の功德に対して、人をして法華經に入らしめんがために造るところの書なり。故に往生要集の後に一乗要決を造りて自身の内証を述ぶる時、法華經をもつて本意となす。

しかるに源空並に所化の衆、この義を知らざるが故に、法華・真言をもつて三師並に源信の所破の難・聖・雜並に往生要集の序の顯密の中に入れて、三師並に源信を法華・真言の謗法の人となす。その上、日本国の一切の道俗を化し、法華・真言において時機不相応

の旨を習わしめ、在家・出家の諸人において法華・真言の結縁を留む。あに仏の記したも
 うところの「悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲」の人にあらずや。また「則ち一切世
 間の仏種を断ずる」の失を免るべきや。その上、山門・寺門・東寺・天台並に日本國中
 の法華・真言等を習う諸人を群賊・悪衆・悪見の人等に譬うる源空が重罪、何れの劫にか
 その苦果を經尽すべきや。法華經の法師品に持經者を罵る罪を説いて云く、「もし悪人あ
 りて、不善の心をもつて、一劫の中において、現に仏前において、常に仏を毀罵せん、そ
 の罪なお輕し。もし人一つの悪言をもつて、在家・出家の法華經を讀誦する者を毀訾せん、
 その罪甚だ重し」已上經文。一人の持者を罵る罪すらなおかくのごとし。いわんや、
 書を造り日本國の諸人に罵らしむる罪をや。いかにいわんや、この經を「千中無一」と定
 め、法華經を行ずる人に疑いを生ぜしむる罪をや。いかにいわんや、この經を捨てて觀
 經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや。願わくは一切の源空が所化の四衆、頓に選択集
 の邪法を捨てて忽ちに法華經に遷り、今度阿鼻の炎を脱れよ。

問うて云く、正しく源空が法華經を誹謗する証文如何。

答えて云く、法華經の第二に云く、「もし人信ぜずしてこの經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」と經文。不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり。故に天親菩薩の仏性論の第一にこの文を釈して云く、「もし大乘に憎背するは、これはこれ一闡提の因なり。衆生をしてこの法を捨てしむるをもつての故なり」と論文。謗法の相貌はこの法を捨てしむるが故なり。選択集は人をして法華經を捨てしむる書にあらずや。

「閣抛」の二字は仏性論の「憎背」の二字にあらずや。また法華經誹謗の相貌は四十余年の諸經のごとく、小善成仏をもつて別時意趣と定むる等なり。故に天台の釈に云く、「もし小善成仏を信ぜずんば、則ち世間の仏種を断ずるなり」と。妙樂重ねてこの義を宣べて云く、「この經は遍なく六道の仏種を開す。もしこの經を謗せば、義断に當るなり」と。釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・天台・妙樂の意のごとくんば、源空は謗法の者なり。詮ずるところ、選択集の意は、人をして法華・真言を捨てしめんと定めて書き了んぬ。謗

法の義疑いなきものなり。

大文の第三に、せんちやく選択集のえんぎ謗法の縁起をいた出さば、

問うて云く、何れの証拠をもつて源空を謗法の者と称するや。

答えて云く、せんちやくくしゆ選択集の現文を見るに、一代聖教をもつて二に分つ。一には、しやうだい聖道・なん難行

・じやく雑行、二には、じよつど浄土・いぎ易行・しやうぎん正行なり。その中に聖・難・雑と云うは、けしん華嚴・あごん阿含・ほうどう方等

・はんじや般若・ほつげ法華・ねはん涅槃・だいじやく大日経等なり。取意。浄・易・正と云うは、浄土三部経の称名念

仏等なり。取意。聖・難・雑の失を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば、百の時に希まれ

に一、二を得、千の時に希まれに三、五を得ん、或は千が中に一もなし、或は群賊・悪衆・邪

見・悪見・じやく邪雑の人等と定むるなり。浄・易・正の得を判ずるには、末代の凡夫これを行

ぜば、十は即ち十生じやくじ、百は即ち百生ひやくぜん等なり。謗法の邪義これなり。

問うて云く、一代聖教を聖道・浄土、難行・易行、正行・雑行と分つ。その中に、難・聖

・雑をもつて、時機不相応と称すること、ただ源空一人の新義にあらず。曇鸞・道綽・善導の三師の義なり。これまたこれらの人師の私の擦にあらず。その源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり。もし源空を謗法の者と称せば、竜樹菩薩並に三師を謗法の者と称するにあらずや。

答えて云く、竜樹菩薩並に三師の意は、法華已前の四十余年の経々において難易等の義を存す。しかるに源空より已来、竜樹並に三師の難行等の語を借りて、法華・真言等をもつて難・雑等の内に入れぬ。所化の弟子、師の失を知らず。この邪義をもつて正義なりと存じ、この国に流布せしむるが故に、国中の万民は悉く法華・真言等において時機不相応の想をなす。その上、世間を貪る天台・真言の学者、世の情に随わんがために、法華・真言等において時機不相応の悪言を吐き、選択集の邪義を扶け、一旦の欲心に依りて、釈迦・多宝並に十方の諸仏の御評定の「法をして久住せしめ」「閻浮提において広宣流布せしむ」との誠言を壊り、一切衆生において一切三世十方の諸仏の舌を切るの罪を得せしむ。偏

にこれ「悪世の中の比丘は邪智にして、心諂曲に、いまだ得ざるをこれ得たりと謂い、乃至、悪鬼その身に入りて、仏の方便随宜所説の法を知らざる」が故なり。

問うて云く、竜樹菩薩並に三師、法華・真言等をもつて難・聖・雑の内に入れざるを、源空私わたたくしにこれを入るとは何をもつてかこれを知るや。

答えて云く、遠く余処に証拠を尋ぬべきにあらず。すなわち選択集にこれ見えたり。

問うて云く、その証文如何。

答えて云く、選択集の第一篇に云く、「道綽禅師、聖道・浄土の二門を立て、聖道を捨てて正しく浄土まはに帰するの文」と約束おわしたつて、次下に安樂集あんらくじゆうを引き、私の料簡りょうげんの段に云く、「初めに聖道門せいだうもんとは、これについて二あり。一には大乘、二には小乗なり。大乘の中について、顕密けんみつ・権実等の不同ありといえども、今この集の意は、ただ顕大及び権大を存す。故に歴劫迂迴りきやくうゐの行に当る。これに準じてこれを思うに、まさに密大および実大をも存すべし」と已上。選択集の文なり。この文の意は、道綽禅師の安樂集の意は、

法華已前の大小乗經において、聖道・浄土の二門を分つといえども、我れ私に法華・真言等の実大・密大をもつて、四十余年の権大乘に同じて聖道門と称す。「準之思之」の四字これなり。この意に依るが故に、また曇鸞の難・易の二道を引く時、私に法華・真言をもつて難行道の中に入れ、善導和尚の正・雜二行を分つ時も、また私に法華・真言をもつて雜行の内に入る。総じて選択集の十六段に亘りて無量の謗法を作す根源は、偏にこの四字より起る。誤れるかな、畏しきかな。

ここに源空の門弟、師の邪義を救うて云く、諸宗の常の習い、たとい經論の証文なしといえども、義類の同じきを聚めて一処に置く。しかも選択集の意は、法華・真言等を集めて雜行の内に入れ、正行に対してこれを捨つ。偏に經の法体を嫌うにあらず。ただ風勢なき末代の衆生を常没の凡夫と定めて、この機に易行の法を選ぶ時、称名念仏をもつてその機に当て、易行の法をもつて諸教に勝ると立つ。権実・浅深等の勝劣を詮するにあらず。雜行と云うも嫌つて雜行と云うにはあらず。雜と云うは不純を雜と云ふ。その上、諸

の経論並に諸師もこの意なきにあらず。故に叡山の先徳の往生要集の意は偏にこの義なり。所以に往生要集の序に云く、「顕密の教法はその文一にあらず。事理の業因はその行これ多し。利智精進の人はいまだ難しとせず。予がごとき頑魯の者、あにあえてせんや。この故に念仏の一門に依る」と云云。この序の意は、慧心先徳も法華・真言等を破するにあらず。ただ偏に我等頑魯の者の時に当て、法華・真言は聞き難く行じ難きが故に、我が身鈍根なるが故なり。あえて法体を嫌うにはあらず。その上、序より已外正宗に至るまで十門あり。大文の第八門に述べて云く、「今念仏を勧むること、これ余の種種の妙行を遮するにあらず。ただこれ男女・貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず。乃至、臨終には往生を願求するに、その便宜を得ること念仏には如かず」と已上。これらの文を見るに、源空の選択集と源信の往生要集と、一卷と三巻の不同ありといえども、一代聖教の中には易行を撰んで、末代の愚人を救わんと欲する意趣はただ同じ事なり。源空上人、真言・法華を難行と立てて悪道に墮せば、慧心先徳もまたこ

の失とがを免まぬるべからず、如何いかに。

答えて云く、汝師なんじの謗法とがの失とがを救わんがために、事ことを源信げんしんの往生要集おんじやういぢふに寄せて、謗法とがの上うへにいよいよ重罪じゆうざいを招くものなり。その故は釈迦如来五十年の説教に、総じて先四十二年さきの意いを無量義経むりやうぎけいに定めて云く、「険けわしき逕みちを行なくに留難るなん多おほきが故に」と。無量義経むりやうぎけいの已後いごを定めて云く、「大直道だいじきだうを行なくに留難るなんなきが故に」と。仏みづか自ら難易なんい・勝劣しやうりやくの二道にだうを分ちたまえり。仏みづかより外等ほかとう覚かく已下いげ末代まくだいの凡師ぼんしに至るまで、自義じぎをもつて難易なんいの二道にだうを分ち、この義ぎに背く者は外道げだう・魔王まおうの説せつに同じからんか。随ずつて四依しえの大士だいし竜樹菩薩りゆうじゆぼつの十住毘婆沙論じゆうびばしやろんには、法華已前ほふげぜんにおいて難易なんいの二道にだうを分ち、あえて四十余年已後の経けいにおいて難行なんぎやうの義ぎを存ぞんせず。その上うへ、もし修しゆし易いきをもつて易行いぎやうと定めば、法華経ほふげけいの五十展転ごじゆせんてんの行ぎやうは称名念佛しやうみやうぶつより行ぎやうじ易いきこと百千万億倍ひやくせんまんいぢふばいなり。もしまた勝しやうをもつて易行いぎやうと定めば、分別功德品ぶんべつくんとくほんに爾前にぜん四十余年の八十万億劫はちだういぢやくの間の、檀だん・戒かい・忍にん・進しん・念仏三昧等ねんぶつさんまいの先さきの五波羅蜜ごはらみつの功德くんとくをもつて、法華経ほふげけいの一念信解いちねんしんげの功德くんとくに比するに、一念信解いちねんしんげの功德くんとくは念仏三昧等ねんぶつさんまいの先さきの五波羅蜜ごはらみつに

勝るること百千万億倍なり。難易勝劣と謂い、行浅功深と謂い、觀經等の念仏三昧を法華經に比するに、難行の中の極難行、勝劣の中の極劣なり。その上、悪人・愚人を扶くこと、また教の浅深に依る。阿含十二年の戒門には、現身に四重・五逆の者に得道を許さず。華嚴・方等・般若・双觀經等の諸經は、阿含經より教深きが故に、觀門の時、重罪の者を擯すといえども、なお戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず。しかりといえども、決定性の二乗・無性の闡提においては戒・觀共にこれを許さず。法華・涅槃等には、ただ五逆・七逆・謗法の者を擯するのみにあらず、また定性・無性をも擯す。なかんずく、末法においては常没の闡提これ多し。あに觀經等の四十余年の諸經においてこれを扶くべけんや。無性の常没・決定性の二乗は、ただ法華・涅槃等に限り。四十余年の經に依る人師は彼の經の機を取る。この人はいまだ教相を知らざるが故なり。ただし往生要集は、一往序文を見る時は、法華・真言等をもつて顯密の内に入れて、殆ど末代の機に叶わずと書すといえども、文に入りて委細に一部三卷の始末を見るに、第十の

問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時、観仏三昧・般舟三昧・十住毘婆沙論・宝積
 ・大集等の爾前の経論を引いて、一切の万行に対して、念仏三昧をもつて王三昧と立て了
 んぬ。最後に一つの問答あり。爾前の禅定念仏三昧をもつて、法華経の一念信解に対す
 るに、百千万億倍劣ると定む。また問を通ずる時、念仏三昧を万行に勝るといふは、爾
 前の当然なりと云云。まさに知るべし。慧心の意は、往生要集を造りて末代の愚機を調
 えて、法華経に入れんがためなり。例せば仏の四十余年の経をもつて権機を調べ、法華経
 に入れたもうがごとし。

故に最後に一乗要決を造る。その序に云く、「諸乗の権実は古来の諍いなり。俱に経論に拠
 りて是非を執す。余、寛弘丙午の歳冬十月、病中に歎いて曰く、仏法に遇うといえども、
 仏意を了せず。もし終に手を空しうせば、後悔何ぞ追はん。ここに経論の文義・賢哲の
 章疏、或は人をして尋ねしめ、或は自ら思択し、全く自宗・他宗の偏党を捨てて、専ら権智
 ・実智の深奥を探るに、終に一乗は真實の理、五乗は方便の説を得る者なり。すでに今生

の蒙もつを開く、何ぞ夕死せしの恨みを遺のこさんや」と 已上。この序の意は偏ひとへに慧心えしんの本意ほんいを
 顕あわすなり。自宗・他宗の偏党を捨つる時、浄土の法門を捨てざらんや。一乗は真実の理
 を得る時、専ら法華經に依るにあらずや。源信僧都は永觀二年甲申の冬十一月往生要集
 を造り、寛弘三年丙午の冬十月の比一乗要決を造る。その中間二十余年なり。權を先にし、
 実じつを後にす。あたかも仏のごとく、また竜樹・天親・天台等のごとし。汝、往生要集を便たよ
 りとして、師の謗法の失とがを救わんと欲すれども、あえてその義類に似ず。義類の同じきを
 もつて一処に聚あつむとは、何等の義類同なるや。華嚴經のごときは、二乗界を隔へだつるが故に
 十界互具じっかいごこくなし。方等・般若の諸經もまた十界互具を許さず。觀經等の往生極樂もまた方
 便の往生なり。成仏じやうぶつ・往生俱せとに法華經のごとき往生にあらず。皆別時意趣みなえはむじの往生・成仏
 なり。

その上、源信僧都の意いは、四威儀に行じ易やすきが故に念仏をもつて易行やすぎと言いひ、四威儀に
 行じ難たがきが故に法華をもつて難行たがと称せば、天台・妙樂みょうらくの積を破る人なり。所以ゆゑに妙樂

大師は、末代の鈍者・無智の者等の法華經を行ずるに、普賢菩薩並に多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云く、「散心に法華を誦し、禪三昧に入らず、坐立行一心に法華の文字を念ぜよ」と已上。この釈の意趣は偏に末代の愚者を撰せんがためなり。散心とは定心に対する語なり。法華を誦すとは、八卷・一卷・一字・一句・一偈・題目、一心一念隨喜の者、五十展轉等なり。坐立行とは四威儀を嫌わざるなり。一心とは、定の一心にもあらず、理の一心にもあらず、散心の中の一心なり。法華の文字を念ずるとは、この經は諸經の文字に似ず、一字を誦すといえども、八万宝蔵の文字を含み、一切諸仏の功德を納むるなり。

天台大師玄義の八に云く、「手に巻を執らざれども常にこの經を読み、口に言声なれども徧く衆典を誦し、仏説法せざれども恒に梵音を聞き、心に思惟せざれども普く法界を照す」と已上。この文の意は、手に法華經一部八卷を執らざれども、この經を信ずる人は昼夜十二時の持經者なり。口に読經の声を出さざれども、法華經を信ずる者は日々

時々念々に一切経を読む者なり。仏の入滅はすでに二千余年を経たり。しかりといえども、
 法華経を信ずる者の許に仏の音声留めて、時時刻々念々に我が死せざる由を聞かしむ
 るなり。心に一念三千を觀ぜざれども、徧く十方法界を照す者なり。これらの徳は徧に
 法華経を行ずる者に備われるなり。この故に法華経を信ずる者は、たとい臨終の時、心に
 仏を念せず、口に経を誦せず、道場に入らずとも、心なくして法界を照し、音なくして一
 切経を誦し、巻軸を取らずとも法華経八巻を拳る徳これあり。これあに權教の念仏者の
 臨終正念を期して十念の念仏を唱えんと欲する者に、百千万倍勝るるの易行にあらずや。
 故に天台大師文句の十に云く、「都て諸教に勝るるが故に、隨喜功德品と言つ」と。妙樂
 大師の法華経は諸経より淺機を取る、しかるを人師この義を弁えざるが故に、法華経の
 機を深く取る事を破して云く、「恐らくは人謬り解する者、初心の功德の大なることを測
 らずして、功を上位に推して、この初心を蔑る。故に今彼の行は淺く功の深きことを示
 して、もつて経力を顯わす」と已上。「もつて経力を顯わす」の釈の意趣は、法華経

は觀經等の權經に勝れたるが故に、行は浅く功は深し。浅機を損するが故なり。もし慧心の先徳、法華經をもつて念仏より難行と定め、愚者・頑魯の者を損せずと云わば、恐らくは逆路伽耶陀の罪を招かざらんや。また「恐らくは人謬り解する」の内に入らざらんや。

総じて天台・妙楽の三大部の本末の意は、法華經は諸經に漏れたる愚者・悪人・女人・常没の闡提等を損したもうなり。他師は仏意を覺らざるが故に、法華經を諸經に同じ、或は地住の機に取り、或は凡夫においても別時意趣の義を存す。これらの邪義を破して、人天・四悪をもつて法華經の機と定む。種類・相對をもつて過去の善惡を収む。人天に生ずる人、あに過去の五戒十善なからんや等と定め了んぬ。もし慧心この義に背かば、あに天台宗を知れる人ならんや。

しかるに源空深くこの義に迷うが故に、往生要集において僻見を起して、自らも失い他をも誤る者なり。たまたま宿善ありて実教に入りながら、一切衆生を化して權教に還ら

しめ、剩あまじえ実教を破せしむ。あに悪師にあらずや。彼の久遠下種くおんげしゆ・大通結縁だいつうけちえんの者の五百
 ・三千の塵点じんてんを經ふるがときは、法華の大教だいきやうを捨てて爾前にぜんの権小こんしやうに遷うつるが故に、後には
 権經ごんきやうをも捨てて六道ろくどうに回りぬ。不輕ふきやう輕毀きやうきの衆しゆは千劫せんごう阿鼻地獄あびじこくに墮おつ。権師ごんしを信じて実經じつきやう
 を弘ひろむる者に誹謗ひぼうをなしたるが故なり。しかるに源空げんくう、我が身にただ実經じつきやうを捨てて権經ごんきやう
 に入るのみにあらず、人を勸すすめて実經じつきやうを捨てて権經ごんきやうに入らしめ、また権人ごんじんをして実經じつきやうに入
 らしめず。剩あまじえ実經じつきやうの行者ぎやうじやを罵ののるの罪つみ、永劫えいごうにも浮うび難がたからんか。
 問とうて云いく、十住毘婆沙論じしゆひばしろんは一代の通論つうろんなり。難易なんいの二道の内に何ぞ法華・真言・涅槃
 を入れざるや。

答こたえて云いく、一代の諸大乘經しよだいじやうだいじやうにおいて、華嚴經けげんのごときは初頓しよとん・後分ごぶんあり。初頓しよとんの華嚴は
 二乘にじやうの成じやう・不成ふじやうを論ろんぜず。方等部ぽうとうぶの諸經しよきやうは、一向いっごうに二乘にじやう・無性むじやうの闡提せんたいの成じやうを斥きりう。般若はんにや
 部の諸經しよきやうもこれに同じ。総じて四十余年の諸大乘經しよだいじやうだいじやうの意いは、法華・涅槃・大日經等だいじつきやうとうのごと
 く、二乘にじやう・無性むじやうの成じやうを許ゆるさず。これらをもつてこれを檢かんうるに、爾前にぜんと法華の相違さうゐは水火すいけ

のごとし。滅後の論師竜樹・天親もまた俱に千部の論師なり。所造の論に通・別の二論あり。通論においてもまた二あり。四十余年の通論と一代五十年の通論となり。その差別を分つに、決定性の二乗・無性の闡提の成・不成をもつて、論の権実を定むるなり。しかるに大論は竜樹菩薩の造、羅什三蔵の訳なり。般若経に依る時は二乗作仏を許さず。法華経に依れば二乗作仏を許す。十住毘婆沙論もまた竜樹菩薩の造、羅什三蔵の訳なり。この論もまた二乗作仏を許さず。これをもつて知んぬ。法華已前の諸大乘経の意を申べたる論なることを。

問うて云く、十住毘婆沙論の何れの処に二乗作仏を許さざるの文出でたるや。

答えて云く、十住毘婆沙論の第五に云く、竜樹菩薩造、羅什訳、「もし声聞地及び辟支仏地に墮つる、これを菩薩の死と名づく。すなわち一切の利を失う。もし地獄に墮つとも、かくのごとき畏れを生ぜず。もし二乗の地に墮つれば、すなわち大怖畏をなす。地獄の中に墮つれども、畢竟して仏に至ることを得。もし二乗の地に墮つれば、畢竟して仏道を遮

す」と已上。この文、二乗作仏を許さず。あたかも浄名等の「仏法の中においては、もつて敗種のごとし」の文のごとし。

問うて云く、大論は般若経に依りて二乗作仏を許さず、法華経に依りて二乗作仏を許すの文如何。

答えて云く、大論の一百に云く、竜樹菩薩造、羅什三蔵訳、「問うて曰く、さらに何の法か甚深にして般若に勝れたる者あつて、般若をもつて阿難に属累し、余経をもつて菩薩に属累するや。答えて曰く、般若波羅蜜は秘密の法にあらず。しかるに法華等の諸経は阿羅漢の受決作仏を説く。所以に大菩薩よく受持し用う。譬えば大薬師のよく毒をもつて薬となすがごとし」と。また九十三に云く、「阿羅漢の成仏は論義者の知るところにあらず。ただ仏のみよく了したもう」と已上。これらの文をもつてこれを思うに、論師の権実はあたかも仏の権実のごとし。

しかるに権經ごんきやうに依る人師、猥りに法華等をもつて觀經等の權説に同じ、法華・涅槃等の義を仮りて淨土三部經の徳となし、決定性けつじやうせいの二乗・無性の闡提せんたい・常没等じやうぼつとうの往生を許す。權実ごんじつ雜乱ざらんの失脱とがれ難し。例せば外典げてんの儒者の内典ぬすを賊かきみて外典を莊かきるがごとし。謗法とがの失まぬが免れ難きか。仏自ら權実を分けたもう。その詮を探るに、決定性の二乗・無性有情の成・不成これなり。しかるにこの義を弁わえざる訳者、爾前の經經を訳する時、二乗の作仏・無性の成仏を許さず。これに依りて仏意を覺らざる人師も、また爾前の經において決定性・無性の成仏を明かすと見て、法華と爾前と同じき思いをなし、或は爾前の經において決定けつじやう・無性を嫌うの文もんを見て、この義をもつて了義經りやうぎきやうとなし、法華・涅槃をもつて不了義經となす。共に仏意を覺らず、權実二經に迷えり。これらの誤りを出いさば、ただ源空一人に限るのみにあらず。天竺の論師並に訳者より唐土にんしの人師に至るまでその義あり。いわゆる地論師じろんじ・撰論師せんろんじの一代の別時意趣べつじいしゆ、善導ぜんどう・懷感えかんの法華經のいつしやう一称南無仏の別時意趣、これらは皆權

實を弁えざるが故に出来るところの誤りなり。論を造る菩薩・經を訳する訳者・三昧さんまい発得ほつとくの人師、なおもつてかくのごとし。いかにいわんや、末代の凡師においてをや。

問うて云く、汝、末学の身において何ぞ論師並に訳者・人師を破するや。

答えて云く、あえてこの難を致すことなかれ。撰論師並に善導等の積は、權実こんじつにきよう二教を弁えずして、猥りに法華經をもつて別時意趣と立つ。故に天台・妙楽の積と水火をなすの間、しばらく人師の相違を閣さしおきて、經論に付きて是非を檢かんがうる時、權実の二教は仏説より出たり。天親・竜樹も重ねてこれを定む。この義に順ずる人師をば、しばらくこれを仰ぎ、この義に順ぜざる人師をば、しばらくこれを用いず。あえて自義をもつて是非を定むるにあらず。ただ相違を出す計いだしばりなり。

大文の第四に、謗法の者を対治すべき証文を出さば、これに二あり。一には、仏法をもつて国王・大臣並に四衆ししゆに付囑しすることを明かし、二には、正しく謗法の人の王地に処あるを

ば対治すべき証文を明かす。

第一に、仏法をもつて国王・大臣並に四衆に付嘱することを明かさば、仁王経にんのりきょうに云く、
 「仏、波斯匿王はしのくおうに告げたまわく、乃至ないし、この故に諸の国王に付嘱して、比丘・比丘尼・清信男しよしんなん・清信女しよしんにょに付嘱せず。何をもつての故に。王の威力いりきなきが故に。乃至、この経の三宝さんぼうをば、
 諸の国王・四部の弟子に付嘱す」と 已上。大集経だいしつきょう二十八に云く、「もし国王ありて我が法の滅せんを見て、捨てて擁護おうごせずんば、無量世において施・戒・慧えを修しゆすとも、悉く皆滅失し、その国に三種の不祥の事を出いださん。乃至、命終みよじゆうして大地獄だいじやくに生しよぜん」と 已上。仁王経にんのりきょうの文のごとくんば、仏法をもつて先まず国王に付嘱し、次に四衆に及ぼす。王位きみに居る君、国を治むる臣は、仏法をもつて先まとなして国を治むべきなり。大集経の文のごとくんば、王臣等仏道のために、無量劫の間、頭目ずもく等の施ほじを施し、八万の戒行たいもくを持ち、無量の仏法を学ぶといえども、国に流布する所の法の邪正じやしやうを直たださざれば、国中たいふうに大風・

旱魃・大雨の三災起りて、万民を逃脱せしめ、王臣定めて三悪に墮ちん。

また双林最後の涅槃經の第三に云く、「今正法をもつて諸の王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付嘱す」。「乃至、法を護らざる者をば禿居士と名づく」と。また云く、「善男子、正法を護持せん者は五戒を受けず、威儀を修せず、まさに刀劍・弓箭・鉞槩を持すべし」と。また云く、「五戒を受けざれども、正法を護るをもつて、すなわち大乘と名づく。正法を護る者は、まさに刀劍・器械を執持すべし」と云云。四十余年の内にも梵網等の戒のごとくんば、国王・大臣・諸人等、一切の刀杖・弓箭・矛斧・鬪戦の具を畜うることを得ず。もしこれを畜うる者は、定めて現身に国王の位、比丘・比丘尼の位を失い、後生は三悪道の中に墮つべしと定め了んぬ。しかるに今の世は道俗を扱はず、弓箭・刀杖を帶せり。梵網經の文のごとくんば、必ず三悪道に墮ちんこと疑いなき者なり。涅槃經の文なくんば、如何にしてかこれを救わん。また涅槃經の先後の文のごとくんば、弓箭・刀杖を帶して悪法の比丘を治し、正法の比丘を守護せん者は、先世の四重・五逆を滅

して、必ず無上道を証せんと定め給う。

また金光明経第六（こくわうめいけいむろく）に云く、「もし人ありてその国土において、この経ありといえども、いまだ曾て流布せず、捨離（しやり）の心を生じて聴聞（ちやうもん）せんことを樂（ねが）わず、また供養（そんじやう）し尊重（さんだん）し讚歎（さんだん）せず。四部の衆（しゆ）、持經（じきやう）の人を見て、また尊重し乃至供養すること能（あた）わず。遂に我等及び余の眷属（けんぞく）無量の諸天をして、この甚深（じんじん）の妙法を聞くことを得ず、甘露（かんろ）の味に背き、正法（しやうぽう）の流を失い、威光及び勢力あることなからしめ、悪趣を増長して、人天（にんでん）を損滅（そんげん）し、生死（しやうじ）の河に墮（お）ちて、涅槃（みち）の路（そむ）に乖（そむ）かん。世尊（われら）、我等四王並に諸の眷属及び藥叉（やしゃ）等、かくのごとき事を見て、その国土を捨て、擁護の心なけん。ただ我等のみこの王を捨棄（しやき）するにあらず、また無量の国土を守護する諸大善神（しよだいぜんじん）あらんも、皆悉く捨去（しやこ）せん。すでに捨離（しり）し已（おわ）りなば、その国まさに種々の災禍あつて国位を喪失（そうしつ）すべし。一切の人衆皆善心なく、ただ擊縛（けいばく）・殺害（せつがい）・瞋諍（ちんじやう）のみあり、互に相讒（さん）諂（たん）し、枉（ま）げて辜（つみ）なきに及ばん。疫病流行し、彗星（すいせい）しばしば出で、兩日並び現じ、薄蝕（はくしやく）恒（とこ）なく、黑白の二つの虹不祥の相を表わし、星流れ、地動き、

井の内に声を発し、暴雨悪風は時節に依らず、常に飢饉に遭いて、苗実成らず、多く他方の怨賊あつて国内を侵掠し、人民は諸の苦惱を受け、土地に可樂の処あることなけん」と已上。この経文を見るに、世間の安穩を祈らんに、しかも国に三災起らば、悪法流布するが故なりと知るべし。しかるに当世は、随分国土の安穩を祈るといへども、去ぬる正嘉元年には大地大に動じ、同じき二年には大雨・大風苗実を失えり。定めて国を喪すの悪法、この国にあるかと勘うるなり。

選択集の或段に云く、「第一に読誦雑行とは、上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小・顯密の諸經において受持読誦するを、悉く読誦雑行と名づく」と書き了りて、次に書いて云く、「次に二行の得失を判ぜば、法華・真言等の雜行は失、淨土三部經は得なり」と。次下に善導和尚の往生礼讚の「十即十生・百即百生・千中無一」の文を書き載せて云く、「私に云く、この文を見るにいよいよすべからく雜を捨てて專を修すべし。あに百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の雜修雜行を執せんや。行者よくこれを思量

せよ」と 已上。これらの文を見るに、世間の道俗、あに諸経を信ずべきや。次下にまた法華経等の雑行と、念仏の正行との勝劣・難易を書き定めて云く、「一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣の義とは、念仏はこれ勝、余行はこれ劣。次に難易の義とは、念仏は修し易く、諸行は修し難し」と。また次下に法華・真言等の失を定めて云く、「故に知んぬ、諸行は機にあらず時を失う。念仏往生のみ機に当り時を得たり」と。また次下に法華・真言等の雑行の門を閉じて云く、「随他の前には暫く定散の門を開くといえども、随自の後には還つて定散の門を閉ず。一たび開いて以後永く閉じざるは、ただ念仏の一門なり」と 已上。最後の本懐に云く、「それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣いて、撰んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雑二行の中に、しばらく諸の雑行を抛つて、撰んで正行に帰すべし」と 已上。門弟この書を伝えて、日本六十余州に充滿するが故に、門人は世間の無智の者に語りて云く、「上人智慧第一の身としてこの書を造り、真実の義を定め、法華・真言の門を閉じて

後に開くひらの文なく、抛なちて後に還かへつて取るの文なし」等と立つる間、世間の道俗一同に頭こゝろを傾かたむけ、その義を訪とう者には、仮か字をもつて選択せんたくの意を述べ、或あるは法然上人の物語を書かす間、法華・真言において難を付け、或あるは去年こぞの曆こよみ・祖父そふの履くつに譬たとへ、或あるは法華經を讀よむは管弦かんげんより劣るとす。かくのごとき悪書、国中に充滿するが故に、法華・真言等国にありといえども、聴聞せんことを樂たのまず。たまたま行いずる人ありといえども、尊重そんじやうを生ぜず。一向念佛者は、法華等の結縁けちえんをなすをば、往生じやうじやうの障さりとなると云う。故に捨離しつりの意こころを生ぜず。この故に諸天は妙法を聞くことを得ず、法味ほふみを嘗なめざれば、威光・勢力あることなく、四天王並に眷屬この国を捨て、日本国守護の善神も捨離しつりし已おひぬ。故に正嘉元年には大地おほい大おほに震ふるい、同じき二年にも春の大雨に苗を失い、夏の大旱魃かんぱつに草木を枯らし、秋の大風に果実を失い、飢渴きかつ忽ち起りて万民を逃脫とうだつせしむること、金光明經の文のごとし。あに選択集せんたくしゆの失とがにあらずや。仏語虚むなしからざるが故に、悪法の流布ありて、すでに国に三災起れり。しかるにこの悪義を対治せずんば、仏の所説の三悪のを脱のがるべけんや。

しかるに近年より、予、「我身命を愛せず、ただ無上道を惜む」の文を瞻るの間、雪山・常啼の心を起し、命を大乘の流布に替え、強言を吐いて云く、選択集を信じて、後世を願う人は無間地獄に墮つべしと。その時に法然上人の門弟、選択集において上に出すところの悪義を隠し、或は諸行往生を立て、或は選択集において法華・真言等を破せざる由を称し、或は在俗において選択集の邪義を知らしめざらんために、妄語を構えて云く、日蓮は念仏を称うる人を三悪道に墮つと云うと。

問うて云く、法然上人の門弟、諸行往生を立つるに失ありや、否や。

答えて云く、法然上人の門弟と称して諸行往生を立つるは、逆路伽耶陀の者なり。当世もまた諸行往生の義を立つ。しかも内心には一向に念仏往生の義を存し、外には諸行を謗らざるの由を聞かしむるなり。そもそもこの義を立つる者は、選択集の法華・真言等において失を付け、捨閉閣抛・群賊・邪見・悪見・邪雑人・千中無一等の語を見ざるや、否や。

第二に、正しく謗法の人の王地に処るを、対治すべき証文を出さば、涅槃経第三に云く、
 「懈怠にして、戒を破し、正法を毀る者をば、王者・大臣・四部の衆、まさに苦治すべし。
 善男子、この諸の国王及び四部の衆は、まさに罪ありや不や。不なり、世尊。善男子、こ
 の諸の国王及び四部の衆は、なお罪あることなし」と。また第十二に云く、「我往昔を念
 うに、閻浮提において大国の王と作り、名を仙予と曰いき。大乘經典を愛念し敬重し、
 その心純善にして麤悪・嫉妬あることなかりき。乃至、善男子、我その時において心に大
 乗を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已りて即時にその命根を断じき。善
 男子、この因縁をもつてこれより已來、地獄に墮ちず」と已上。
 問うて云く、梵網經の文を見るに、比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪なり。しかるに源
 空が謗法の失を顕わすは、あに阿鼻の業にあらずや。
 答えて云く、涅槃経の文に云く、「迦葉菩薩世尊に言さく、如来何が故ぞ彼まさに阿鼻地
 獄に墮つべしと記するや。善男子、善星比丘は多く眷屬あり。皆善星はこれ阿羅漢なり、

これ道果を得たりと謂えり。我、彼が悪邪の心を壊らんと欲する故に、彼の善星は放逸をもつての故に地獄に墮つべしと記す」と 已上。この文の放逸とは謗法の名なり。源空もまた彼の善星のごとく、謗法をもつての故に無間に墮つべし。所化の衆はこの邪義を知らざるが故に、源空をもつて一切智人と号し、或は勢至菩薩、或は善導の化身なりと云う。彼が悪邪の心を壊らんがための故に、謗法の根源を顕わす。梵網經の説は、謗法の者の外の四衆なり。仏誡めて云く、「謗法の人を見てその失を顕わさざれば、仏の弟子にあらず」と。故に涅槃經に云く、「我涅槃の後、その方面に随いて、持戒の比丘ありて、威儀具足し、正法を護持せん。法を壊る者を見て、すなわちよく駈遣し呵責し徴治せよ。まさに知るべし、この人は福を得んこと、無量にして称計すべからず」と。また云く、「もし善比丘ありて、法を壊る者を見て、置いて呵責し駈遣し拳処せずんば、まさに知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もしよく駈遣し呵責し拳処せば、これ我が弟子眞の声聞なり」と 已上。予、仏弟子の一分に入らんがために、この書を造り謗法の失を顕わし、

世間に流布す。願わくは、十方の仏陀この書において力を副え、大悪法の流布を止め、一切衆生の謗法を救わしめたまえ。

大文の第五に、善知識並に眞実の法に値い難きことを明かさば、これについて三あり。一には受け難き人身、値い難き仏法なることを明かし、二には受け難き人身を受け、値い難き仏法に値うといえども、悪知識に値うが故に三悪道に墮つることを明かし、三には正しく末代の凡夫のための善知識を明かす。

第一に、受け難き人身、値い難き仏法なることを明かさば、涅槃經三十三に云く、「その時に世尊、地の少しき土を取りてこれを爪の上に置き、迦葉に告げて言く、この土多きや、十方世界の地の土多きやと。迦葉菩薩、仏に白して言く、世尊、爪の上の土は十方所有の土に比すべからずと。善男子、人ありて、身を捨てて還つて人身を得、三悪の身を捨

てて人身を受くることを得、諸根完具して中国に生じ、正信を具足してよく道を修習し、道を修習し已りてよく正道を修し、正道を修し已りてよく解脱を得、解脱を得已りてよく涅槃に入るは、爪の上の土のごとく、人身を捨て已りて三悪の身を得、三悪の身を捨てて三悪の身を得、諸根具せずして辺地に生じ、邪倒の信を信じて邪道を修習し、解脱常樂の涅槃を得ざるは、十方界の所有の地の土のごとし」と 已上經文。

この文は、多く法門を集めて一具とせり。人身を捨てて還つて人身を受くるは爪の上の土のごとく、人身を捨てて三悪道に墮つるは十方の土のごとし。三悪の身を捨てて人身を受くるは爪の上の土のごとく、三悪の身を捨てて還つて三悪の身を得るは十方の土のごとし。人身を受くるは十方の土のごとく、人身を受けて六根欠けざるは爪の上の土のごとし。人身を受けて六根欠けざれども、辺地に生ずるは十方の土のごとく、中国に生ずるは爪の上の土のごとし。中国に生ずるは十方の土のごとく、仏法に値うは爪の上の土のごとし。また云く、「一闡提と作らず、善根を断ぜず、かくのごときらの涅槃經典を信ずるは、爪の

上の土のごとく、乃至、一闡提と作つて諸の善根を断じ、この経を信ぜざる者は、十方界
 所有の地の土のごとし」と 已上経文。この文のごとくんば、法華・涅槃を信ぜずして
 一闡提と作るは十方の土のごとく、法華・涅槃を信ずるは爪の上の土のごとし。この経文
 を見て、いよいよ感涙押え難し。

今日本國の諸人を見聞するに、多分は権教を行ず。たとい身口には実教を行ずといえど
 も、心にはまた権教を存す。故に天台大師摩訶止觀の五に云く、「それ癡鈍なる者は毒氣
 深く入りて本心を失うが故に、すでにそれ信ぜざれば則ち手に入らず。乃至、大罪聚の人
 なり。乃至、たとい世を厭う者も下劣の乗を翫び、枝葉に攀附し、狗作務に狎れ、獼猴
 を敬うて帝釈となし、瓦礫を崇んでこれ明珠なりとす。これ黒闇の人なり。あに道を論
 ずべけんや」と 已上。源空並に所化の衆、深く三毒の酒に酔うて、大通結縁の本心を
 失う。法華・涅槃において不信の思を作し、一闡提と作り、觀經等の下劣の乗に依り
 て、方便の称名等の瓦礫を翫び、法然房の獼猴を敬うて智慧第一の帝釈と思ひ、法華

・涅槃の如意珠を捨てて、如来の聖教を漏するは、権実二教を弁えざるが故なり。故に弘決の第一に云く、「この円頓を聞きて宗重せざる者は、良に近代大乘を習う者の雑濫するに由る故なり」と。大乘において権実二教を弁えざるを雑濫と云うなり。故に末代において法華經を信ずる者は爪の上の土のごとく、法華經を信ぜずして権教に墮落するものは十方の微塵のごとし。故に妙樂歎いて云く、「像末は情澆く信心寡薄にして、円頓の教法は蔵に溢れ函に盈つれども、暫くも思惟せず、すなわち瞋目に至る。徒らに生じ徒らに死す。一に何ぞ痛ましきかな」と已上。この釈は偏に妙樂大師権者たるの間、遠く日本国の当代を鑑みて、記し置く所の未来記なり。

問うて云く、法然上人の門弟の内にも、一切経蔵を安置し、法華經を行ずる者もあり。何ぞ皆謗法の者と称せんや。

答えて云く、一切経を開き見、法華經を読むは、難行道の由を称し、選択集の悪義を扶けんがためにす。経論を開くに付きて、いよいよ謗法を増すこと、例せば善星の十二部

經、提婆達多だいばだつたの六万蔵ろくまんぞうのごとし。智者ちしやの由よしを称するは、自身を重んじ悪法を扶けんがためなり。

第二に、受け難き人身にんじんを受け、値い難き仏法に値うといえども、悪知識あくちしきに値うが故に、三悪道さんあくどうに墮おつることを明かさば、仏蔵經ぶつぞうきやうに云く、「大莊嚴だいじやうげんの滅後に五比丘あり。一人は正道しやうどうを知つて多億の人を度し、四人は邪見に住す。この四人命終みやうじゆうして後、阿鼻地獄あびじやくに墮ちて、仰あおぎて臥がし、伏うづに臥ふせし、左脇ひだりわきに臥ふし、右脇みぎわきに臥ふすこと、各おの九百万億歳なり。乃至、もしは在家・出家のこの人に親近せしもの、並もろに諸たんのつの檀越だんごつおよそ六百四万億人、この四師しよしと俱ともに生しじ俱ともに死しし、大地獄だいぢやくにありて諸しよの燒煮やうしゆを受く。大劫だいけつもし尽つきぬれば、この四悪人しよあくにん及び六百四万億の人、この阿鼻地獄あびぢやくより、他方の大地獄だいぢやくの中に転生てんしやうす」と已上いじやう。涅槃經ねはんきやう三十三に云く、「その時に城中じやうちゆうに一の尼乾にけんあり。名を苦得くとくと曰いう。乃至、善星ぜんしやう、苦得くとくに問とう。答こたえて曰いく、我食吐鬼われじきとの身みを得えたり。善星ぜんしやう、諦たいかに聴きけ。乃至、その時に

善星すなわち我が所に還つて、かくのごとき言を作す。世尊、苦得尼乾は命終の後に十三天に生ぜり。乃至、その時に如来、すなわち迦葉と善星の所に往きたもう。善星比丘遙かに我が来るを見、見已つてすなわち悪邪の心を生ず。悪心をもつての故に、生身に陥ち入りて阿鼻地獄に墮つ」と已上。善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり。仏に随い奉り出家して十二部經を受け、欲界の煩惱を壊りて四禪定を獲得せり。しかりといえども、悪知識たる苦得外道に値い、仏法の正義を信ぜざるに依りて、出家・受戒・十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の四比丘に親近せし六百四万億の人は、四師と俱に十方の大阿鼻地獄を経しなり。

今の世の道俗は選択集を貴ぶが故に、源空の影像を拝して、一切經難行の邪義を読む。例せば、尼乾の所化の弟子の尼乾の遺骨を礼して三惡道に墮ちしがごとし。願わくは、今の世の道俗、選択集の邪正を知りて後に供養恭敬を致せ。しからずんば、定めて後悔あらん。故に涅槃經に云く、「菩薩摩訶薩、惡象等においては心に怖畏することなかれ。悪知

識においては怖畏の心を生ぜよ。何をもつての故に。この悪象等はただ能く身を壊りて心を壊ること能わず。悪知識は二俱に壊るが故に。この悪象等はただ一身を壊り、悪知識は無量の善身と無量の善心を壊る。この悪象等はただ能く不浄の臭き身を破壊す。悪知識は能く淨身及び淨心を壊る。この悪象等は能く肉身を壊り、悪知識は法身を壊る。悪象のために殺されては三趣に至らず、悪友のために殺されるれば、必ず三趣に至る。この悪象等はただ身の怨となる、悪知識は善法の怨とならん。この故に菩薩は常に諸の悪知識を遠離すべし」と已上。請い願わくは、今の世の道俗、たといこの書を邪義なりと思うといえども、しばらくこの念を抛ちて、十住毘婆沙論を開き、その難行の内に法華經の入不入を檢え、選択集の「準之思之」の四字を按じて後に是非を致せ。謬りて悪知識を信じて邪法を習い、この生を空しうすることなかれ。

第三に、正しく末法の凡夫のための善知識を明かさば、

問うて云く、善財童子は五十余の知識に値いき。その中に普賢・文殊・観音・弥勒等あり。常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は、曇無竭・普明・耆婆・二子・夫人に値い奉りて、生死を離れたり。これらは皆大聖なり。仏世を去りて後は、かくのごときの師を得ること難しとなす。滅後においてまた竜樹・天親も去りぬ。南岳・天台にも値わず。如何ぞ生死を離るべきや。

答えて云く、末代において真実の善知識あり、いわゆる法華・涅槃これなり。

問うて云く、人をもつて善知識となすは常の習いなり。法をもつて知識となすの証ありや。

答えて云く、人をもつて知識となすは常の習いなり。しかりといえども、末代においては

真の知識なければ、法をもつて知識となすに多くの証あり。摩訶止観に云く、「或は知識

に従い、或は経巻に従いて、上に説く所の一実の菩提を聞く」と已上。この文の意は、

経巻をもつて善知識となすなり。法華經に云く、「もし法華經を閻浮提に行じ、受持する

ことあらん者は、まさにこの念を作すべし、皆これ普賢威神の力なり」と已上。この

文の意いは、末代の凡夫法華經を信ずるは、普賢の善知識の力なり。また云く、「もしこの法華經を受持じゆじし、読誦どくじゆし、正憶念せうおくねんし、修習しゆじゆし、書写することあらん者は、まさに知るべし、この人はすなわち釈迦牟尼仏を見るなり。仏口ぶつくよりこの經典を聞くがごとし。まさに知るべし、この人は釈迦牟尼仏を供養するなり」と 已上。この文を見るに、法華經は釈迦牟尼仏なり。法華經を信ぜざる人の前には、釈迦牟尼仏入滅を取り、この經を信ずる者の前には、滅後たりといえども、仏世ぶつよに在ますなり。また云く、「もし我成われ仏して滅度の後、十方の国土において法華經を説く処あらば、我が塔廟うたみやう、この經を聞かんがための故に、その前に涌現して、ために証明しやうめいを作さん」と 已上。この文の意は、我等法華の名号を唱えば、多宝如来は本願の故に必ず来りたもう。また云く、「諸仏の十方世界じつぽうせかいにあつて法を説くを、尽く還かえして一処いっしょに集めたもう」と 已上。釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等は、我等われらが善知識なり。もしこの義に依らば、我等もまた宿善は、善財・常啼・班足等にも勝すぐれたり。彼は權經けんけいの知識に値い、我等は実經じつけいの知識に値えはなり。彼は權經

の菩薩に値い、我等は実經の仏・菩薩に値い奉ればなり。涅槃經に云く、「法に依りて人に依らざれ、智に依りて識に依らざれ」と 已上。「法に依る」と云うは、法華・涅槃の常住の法なり。「人に依らざれ」とは、法華・涅槃に依らざる人なり。たとい仏・菩薩たりといえども、法華・涅槃に依らざる仏・菩薩は善知識にあらず。いわんや、法華・涅槃に依らざる論師・訳者・人師においてをや。「智に依る」とは仏に依り、「識に依らざれ」とは等覺已下なり。今の世の世間の道俗、源空の謗法の失を隠さんがために、徳を天下に挙げて権化なりと称す。依用すべからず。外道は五通を得て、能く山を傾け海を竭すとも、神通なき阿含經の凡夫に及ばず。羅漢を得て六通を現する二乗は、華嚴・方等・般若の凡夫に及ばず。華嚴・方等・般若の等覺の菩薩も、法華經の名字・觀行の凡夫に及ばず。たとい神通・智慧ありといえども、權教の善知識をば用うべからず。我等常没の一闡提の凡夫、法華經を信ぜんと欲するは、仏性を顕わさんがための先表なり。故に妙樂大師の云く、「内薰にあらざるよりは何ぞよく悟りを生ぜん。故に知んぬ、

悟りを生ずる力は真如しんにょにあり。故に冥薰みやうくんをもつて外護げしとなすなり」と 已上。法華経よりの四十余年の諸経には、十界互具じゅうかいごくなし。十界互具を説かざれば、内心の仏界を知らず。内心の仏界を知らざれば、外の諸仏も顕われず。故に四十余年の権行ごんぎょうの者は仏を見ず。たとい仏を見るといへども、他仏を見るなり。二乗は自らの仏を見ず、故に成仏なし。爾前にぜんの菩薩もまた、自身の十界互具を見ざれば、二乗界の成仏を見ず。故に衆生無辺誓願度じゆじやうむへんせいがんどの願も満足せず。故に菩薩も仏を見ず。凡夫もまた十界互具を知らざるが故に、自身の仏界を顕あらわさず。故に阿弥陀如来の来迎らいごうもなく、諸仏如来の加護かごもなし。譬えば盲人の自身の影を見ざるがごとし。

今法華経に至りて、九界くかいの仏界を開くが故に、四十余年の菩薩・二乗・六凡ろくぼん、始めて自身の仏界を見る。この時この人の前に、始めて仏・菩薩・二乗を立つ。この時に二乗・菩薩始めて成仏し、凡夫始めて往生す。この故に在世・滅後の一切衆生の誠の善知識は、法華経これなり。常途じょうずの天台宗の学者は、爾前にぜんにおいて当分の得道とくだうを許せども、自義において

はなお自分の得道を許さず。しかりといえども、この書においてはその義を尽さず。略してこれを記す。追つてこれを記すべし。

大文の第六に、法華・涅槃に依る行者の用心を明かさば、一代教門の勝劣・浅深・難易等においては、先の段にすでにこれを出す。この一段においては、一向に後世を念う末代常没の五逆・謗法・一闡提等の愚人のためにこれを注す。略して三あり。一には、在家の諸人、正法を護持するをもつて生死を離るべく、悪法を持つに依りて三悪道に墮つることを明かし、二には、ただ法華經の名字計りを唱えて、三悪道を離るべきことを明かし、三には、涅槃經は法華經のための流通と成ることを明かす。

第一に、在家の諸人、正法を護持するをもつて生死を離るべく、悪法を持つに依りて三悪道に墮つることを明かさば、涅槃經第三に云く、「仏、迦葉に告げたまわく、能く正法を護

持する因縁をもつての故に、この金剛身を成就することを得たり」と。また云く、「時に国王あり、名を有徳と曰う。乃至、法を護らんがための故に、乃至、この破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す。乃至、王この時において、法を聞くことを得已りて心大に歡喜し、ついですなわち命終して阿閼仏の国に生ず」と。已上。この文のごとくんば、在家の諸人、別の智行なしといえども、謗法の者を対治する功德に依りて、生死を離るべきなり。問うて云く、在家の諸人の仏法を護持すべき様如何。

答えて曰く、涅槃經に云く、「もし衆生ありて財物に貪著せば、我まさに財を施して、しかして後にこの大涅槃經をもつてこれを勧めて読ましむべし。乃至、先に愛語をもつてこの意に随い、しかして後漸くまさにこの大乘大涅槃經をもつて、これを勧めて読ましむべし。もし凡遮の者には、まさに威勢をもつてこれに逼りて読ましむべし。もし憍慢の者には、我まさにそれがために僕使となりてその意に随順し、それをして歡喜せしむべし。しかして後に、またまさに大涅槃をもつてこれを教導すべし。もし大乘經を誹謗する者あ

らば、まさに勢力をもつてこれを推きて伏せしめ、すでに摧伏し已りて、しかして後に勸めて大涅槃を讀ましむべし。もし大乘經を愛樂する者あらば、我躬らまさに往きて恭敬し供養し尊重し讚歎すべし」と已上。

問うて云く、今の世の道俗、偏に選択集に執して、法華・涅槃においては自身不相応の念をなすの間、護惜建立の心なし。たまたま邪義の由を称する人あらば、念仏誹謗の者と称して悪名を天下に雨す。これらは如何。

答えて曰く、自答を存すべきにあらず。仏自らこの事を記して云く、仁王經に云く、「大王、我が滅度の後、未来世の中の四部の弟子、諸の小国の王・太子・王子、すなわちこれ住持して三宝を護らん者、転た更に三宝を滅破せんこと、師子の身中の虫の自ら師子を食うがごとくならん。外道にあらざるなり。多く我が佛法を壊り、大罪過を得ん。正教衰薄し、民に正行なく、漸く悪をなすをもつて、その寿日に減じて百歳に至らん。人仏教を壊らばまた孝子なく、六親不和にして天神も祐けず。疾疫悪鬼、日に來りて侵害し、災怪首尾

し、連禍縦横し、死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」と。また次下に云く、「大王、未来世の中の諸の小国の王、四部の弟子、自らこの罪を作るは破国の因縁なり。乃至、諸の悪比丘、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し、乃至、その時に当りて正法まさに滅せんとして久しからず」と 已上。

余、選択集を見るに、あえてこの文の未来記に違わず。選択集は法華・真言等の正法を定めて雑行・難行と云い、末代の我等においては時機相応せず、これを行ずる者は千が中に一もなく、仏還りて法華等を説きたもうといえども、法華・真言の諸行の門を閉じて、念佛の一門を開く。末代においてこれを行ずる者は群賊等と定め、当世の一切の道俗においてこの書を信ぜしめ、この義をもつて如来の金言と思わしむ。この故に世間の道俗は仏法建立の意なく、法華・真言の正法の法水忽ちに竭き、天人減少して三悪日に増長す。偏に選択集の悪法に催されて起す所の邪見なり。この経文に仏記して「我が滅度の後」

と云えるは、正法の末八十年、像法の末八百年、末法の末八千年なり。選択集の出たる時は、像法の末、末法の始なれば、八百年の内なり。仁王經に記する所の時節に当れり。「諸の小国の王」とは日本国の王なり。中下品の善とは粟散王これなり。「師子身中の虫のごとし」とは仏弟子の源空これなり。「諸の悪比丘」とは所化の衆これなり。「破仏法の因縁、破国の因縁を説く」とは、上に挙ぐる所の選択集の語これなり。「その王、別えずしてこの語を信聴す」とは、今の世の道俗の邪義を弁えずして、猥りにこれを信ずるなり。請い願わくは、道俗法の邪正を分別して、その後には正法に付いて後世を願え。今度人身を失ひ三悪道に墮ちて、後に後悔するとも何ぞ及ばん。

第二に、ただ法華經の題目許りを唱えて、三悪道を離るべきことを明かさば、法華經第五に云く、「文殊師利、この法華經は無量の国において、乃至名字をも聞くことを得べからず」と。第八に云く、「汝等ただ能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら、福量る

べからず」と。提婆品に云く、「妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちず」と。大般涅槃經名字功德品に云く、「もし善男子・善女人ありて、この經の名を聞きて惡趣に生ずというは、この處あることなし」と。涅槃經は法華經の流通たるが故にこれを引く。

問うて云く、ただ法華の題目を聞くといえども、解心なくば如何にして三惡趣を脱れんや。答えて云く、法華經流布の国に生れて、この經の題名を聞き信を生ずるは、宿善の深厚なるに依れり。たとい今生は惡人・無智なりといえども、必ず過去の宿善あるが故に、この經の名を聞いて信を致す者なり。故に惡道に墮ちず。

問うて云く、過去の宿善とは如何。

答えて曰く、法華經の第二に云く、「もしこの經法を信受することあらん者は、この人はすでに曾て過去の仏を見たてまつり、恭敬し供養し、またこの法を聞けるなり」と。法師品に云く、「また如来の滅度の後、もし人ありて妙法華經の乃至一偈一句を聞いて、一念も

隨喜せん者には、乃至、まさに知るべし、この諸人等はすでに曾て十萬億の仏を供養せし
 なり」と。流通の涅槃經に云く、「もし衆生ありて、熙連河沙等の諸仏において菩提心を発
 し、すなわち能くこの惡世において、かくのごとき經典を受持して誹謗を生ぜず。善男子、
 もし能く一恒河沙等の諸仏世尊において、菩提心を発することありて、しかして後に、すな
 わち能く惡世の中においてこの法を謗せず、この典を愛敬せん」と 已上經文。これら
 の文のごとくんば、たといまず解心なくとも、この法華經を聞いて謗ぜざるは大善の所生
 なり。それ三惡の生を受くること大地微塵より多く、人間の生を受くること爪の上の土
 より少なし。乃至、四十余年の諸經に値うは大地微塵より多く、法華・涅槃に値うことは
 爪の上の土より少なし。上に拏ぐる所の涅槃經の三十三の文を見るべし。たとい一字一句
 なりといえども、この經を信ずるは宿縁多幸なり。

問うて云く、たとい法華經を信ずといえども、惡縁に随わば何ぞ三惡道に墮ちざらんや。
 答えて曰く、解心なき者、權教の惡知識に遇いて實教を退けば、惡師を信ずる失に依り

て、必ず三悪道に墮つべきなり。彼の不輕輕毀の衆は權人なり。大通結縁の者の三千塵点を歴しは、法華經を退いて權教に遷りしが故なり。法華經を信ずるの輩、法華經の信を捨てて權人に随わんより外は、世間の惡業においては法華の功德に及ばず。故に三悪道に墮つべからざるなり。

問うて云く、日本国は法華・涅槃有縁の地なりや否や。

答えて云く、法華經第八に云く、「如来の滅後において、閻浮提の内に広く流布せしめ、断絶せざらしむ」と。七の卷に云く、「広宣流布して閻浮提において断絶せしむることなけん」と。涅槃經第九に云く、「この大乘經典大涅槃經もまたかくのごとし。南方の諸の菩薩のための故に、まさに広く流布すべし」と。已上經文。三千世界広しといえども、仏自ら法華・涅槃をもつて南方流布の処と定む。南方の諸国の中において、日本国は殊に法華經の流布すべき処なり。

問うて云く、その証如何。

答えて曰く、肇公（じちこう）の法華翻經（ほっけほんまきりょう）の後記（こうき）に云く、「羅什三蔵（らじゆつさんざう）、須利耶蘇摩三蔵（すりやそまさんざう）に値（あ）い奉りて、法華經を授かる時の語（ご）に云く、仏日西山（ぶつにちせいざん）に隠れ、遺耀（いよく）東北を照す。この典（てん）東北の諸国（しよこく）に有縁（うゑん）なり。汝慎（でんく）んで伝弘（でんく）せよ」と 已上。東北とは日本なり。西南の天竺（てんしゆく）より東北とは日本を指すなり。故に慧心（えしん）の一乗要決（いちじやうえいけつ）に云く、「日本一州円機純（えんきじゆんじゆん）一なり。朝野遠近（ちやうやえんこん）同じく一乘に歸（き）し、緇素貴賤（しそきせん）悉く成仏（じやうぶつ）を期（こ）す」と 已上。願わくは、日本国の今世（にほんこく）の道俗（だうじやく）、選（せん）択（たく）集（じつ）の久習（くしゆう）を捨てて、法華・涅槃（げんもん）の現文（げんもん）に依り、肇公・慧心（えしん）の日本記（にほんき）を恃（たの）みて、法華修行（ほっけしゆぎ）の安心（あんじん）を企（こ）てよ。

問うて云く、法華經修行の者、何（いず）れの浄土（じやうど）を期（こ）すべきや。

答えて曰く、法華經二十八品の肝心（かんしん）たる寿量品（じゆりやうひん）に云く、「我常（われじやう）にこの娑婆世界（しやばせかい）にあり」と。

また云く、「我常（われじやう）にここに住す」と。また云く、「我がこの土（ど）は安穩（あんゑん）」と。この文のごとくんば、本地（ほんじ）久成（くじやう）の円仏（えんぶつ）はこの世界（せかい）に在（あ）せり。この土（ど）を捨てて何（いず）れの土（ど）を願（ねが）うべきや。

故に法華經修行の者の所住（しよじゆ）の処（ところ）を浄土（じやうど）と思（おも）うべし。何（いず）ぞ煩（わづ）わしく他の処（ところ）を求めんや。故

に神力品に云く、「もしは経卷所住の処、もしは園の中においても、もしは林の中においても、もしは樹の下においても、もしは僧坊においても、もしは白衣の舎にても、もしは殿堂にあつても、もしは山谷曠野にても、乃至、まさに知るべし、この処はすなわちこれ道場なり」と。涅槃經に云く、「もし善男子、この大涅槃微妙の經典、流布せらるる処は、まさに知るべし、その地はすなわちこれ金剛なり。この中の諸人もまた金剛のごとし」と已上。法華・涅槃を信ずる行者は、余処を求むべきにあらず。この經を信ずる人の所住の処はすなわち淨土なり。

問うて云く、華嚴・方等・般若・阿含・觀經等の諸經を見るに、兜率・西方・十方の淨土を勧む。その上、法華經の文を見るに、また兜率・西方・十方の淨土を勧む。何ぞこれらの文に違いて、ただこの瓦礫荆棘の穢土を勧むるや。

答えて曰く、爾前の淨土は久遠実成の釈迦如来の現わすところの淨土にして、實には皆穢土なり。法華經はまた方便・寿量の二品なり。寿量品に至りて實の淨土を定むる時、こ

の土はすなわち浄土なりと定め了んぬ。ただし兜率・安養・十方の難に至りては、爾前の名目を改めずして、この土において兜率・安養等の名を付く。例せば、この經に三乘の名ありといえども、三乘はあらざるがごとし。「すべからく更に觀經等を指すをもちいざるなり」の釈の意これなり。法華經に結縁なき衆生の、当世西方浄土を願うは、瓦礫の土を樂うとはこれなり。法華經を信ぜざる衆生は、誠に分添の浄土なき者なり。

第三に、涅槃經は法華經流通のためにこれを説きたもうを明かさば、問うて云く、光宅の法雲法師並に道場の慧觀等の碩徳は、法華經をもつて第四時の經と定め、無常・熟蘇味と立つ。天台智者大師は法華・涅槃同味と立つるといえども、また拈捨の義を存す。二師共に權化なり。互いに徳行を具せり。何れを正となして我等の迷心を晴らすべきや。

答えて曰く、たとい論師・訳者たりといえども、仏教に違いて權實二教を判ぜずんば、し

ばらく疑うたがいを加くわうべし。いかにいわんや、唐土とうどの人師にんしたる天台たいたい・南岳なんがく・光宅こうたく・慧観えかん・智儼ちげん・嘉祥かじよう・善導ぜんたう等の釈しやくにおいてをや。たとい末代の学者たりといえども、「依法不依人えほうふえにん」の義ぎを存ぞんし、本經ほんきやう・本論ほんろんに違たがはずんば信用しんようを加くわうべし。

問もんうて云いく、涅槃經ねはんきやうの第十四卷じゅうしよたうを開ひらきたるに、五十年ごじゆねんの諸大乘しよだいじやうだいせう經きやうを挙あげて前四味ぜんしよみに譬たとえ、涅槃經ねはんきやうをもつて醍醐味だいごみに譬たとう。諸大乘しよだいせう經きやうは涅槃經ねはんきやうより劣せうること百千万倍ひやくせんばんばいと定めおつた。その上かみ、迦葉童子かじやうどうじの領解りやうげに云いく、「我われ今日こんにちより始めて正見しよけんを得えたり。これより前まへの我等われらは悉しやくく邪見じやけんの人ひとと名なづく」と。この文ぶんの意いは、涅槃經ねはんきやう已前いぜんの法華等ほふわとうの一切衆典しつせうてんを皆みな邪見じやけんと云いふなり。まさを知るべし、法華經ほふわきやうは邪見じやけんの經きやうにして、いまだ正見しよけんの仏性ぶつじやうを明あかさず。故ゆゑに天親菩薩てんしんぼさつの涅槃論ねはんろんに、諸經しよきやうと涅槃ねはんとの勝劣せうれつを定さだむる時とき、法華經ほふわきやうをもつて般若經ぼんげきやうに同じおなじく第四時だいじよじに撰せんしたり。あに正見しよけんの涅槃經ねはんきやうをもつて邪見じやけんの法華經ほふわきやうの流通りゆうつうとなさんや、如何いかん。

答こたえて曰いく、法華經ほふわきやうの現文げんもんを見るに、仏ほとけの本懐ほんがいの残のこることなし。方便品ほふべんに云いく、「今正いまましく

これその時なり」と。寿量品に云く、「毎に自らこの念を作す、何をもつてか衆生をして無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめん」と。神力品に云く、「要をもつてこれを言わば、如来の一切の所有の法、乃至、皆この経において宣示顯説す」と已上。これらの現文は、釈迦如来の内証は皆この経に尽したもう。その上、多宝並に十方の諸仏來集の庭において、釈迦如来の已・今・当の語を証し、法華經のごとき経なしと定めらんぬ。しかるに多宝・諸仏本土に還るの後、ただ釈迦一仏のみ異変を存して、還りて涅槃經を説きて法華經を卑くせば、誰人かこれを信ぜん。深くこの義を存し、随つて涅槃經の第九を見るに、法華經を流通して説いて云く、「この経、世に出ずること、彼の菓實の一切を利益し安樂する所多きがごとく、よく衆生をして仏性を見わさしむ。法華の中の八千の声聞の記莖を授かることを得て、大菓實を成ずるがごときは、秋收冬蔵して更に所作なきがごとし」と。この文のごとくんば、法華經もし邪見ならば、涅槃經もあに邪見にあらずや。法華經は大収、涅槃經は拊拾なりと見えらんぬ。涅槃經は自ら法華經に劣るの

由を称す。法華經の当説の文とあえて相違なし。ただし迦葉の領解並に第十四の文は、法華經を下すの文にあらず。迦葉の自身並に所化の衆、今始めて法華經の所説の常住仏性・久遠実成を覺る。故に我が身を指してこれより已前は邪見なりと云う。法華經已前の無量義經に嫌わるる諸經を、涅槃經に重ねてこれを挙げて嫌うなり。法華經を嫌うにはあらず。また涅槃論に至りては、これらの論は書き付くるがごとく、天親菩薩の造、菩提流支の訳なり。法華論もまた天親菩薩の造、菩提流支の訳なり。經文に違ふことこれ多し。涅槃論もまた本經に違ふ。まさに知るべし、訳者の誤りなり。信用に及ばず。

問うて云く、先の教に漏れたるものを後の教にこれを承け取りて、得道せしむるを流通と称せば、阿含經は華嚴經の流通となるべきや。乃至、法華經は前四味の流通となるべきや、如何。

答えて曰く、前四味の諸經は菩薩・人・天等の得道を許すといえども、決定性の二乗・無性・闡提の成仏を許さず。その上、仏意を探りて実をもつてこれを檢うるに、また菩

薩・人・天等の得道もなし。十界互具を説かざるが故に、久遠実成なきが故に。

問うて云く、証文如何。

答えて云く、法華經方便品に云く、「もし小乗をもつて化すること、乃至一人においてもせば、我すなわち慳貪に墮せん。この事は為めて不可なり」と已上。この文の意は、今選択集の邪義を破せんがために、余事をもつて詮となさず。故に爾前得道の有無の実義はこれを出さず。追つてこれを檢うべし。ただし四十余年の諸經は、実に凡夫の得道なきが故に、法華經を爾前の流通とせず。法華經において、十界互具・久遠実成を顯わしたるんぬ。故に涅槃經は法華經のために流通となるなり。

大文の第七に、問いに隨いて答うとは、もし末代の愚人、上の六門に依りて、万に一も法華經を信ぜば、權宗の諸人、或は自ら惑えるに依り、或は偏執に依りて、法華經の行者を破せんがために、多く四十余年並に涅槃等の諸經を引いて、これを難ぜん。しかるに權教

を信ずる人はこれ多く、或は威勢いせいに依り、或は世間の資縁しえんに依り、人の意いに随したがいて世路せろを亘わたらなぐためにし、或は權教けんきょうには學者多く、實教じつきょうには智者少し。是非に就きて、万にも實教を信ずる者あるべからず。この故にこの一段を撰んで、權人ごんにんの邪難じやなんを防ふがむ。

問うて云く、諸宗の學者難じて云く、「華嚴經は報身ほうじん如來の所説しよせつ、七処八会皆頓極頓証とんごくとんしやうの法門なり。法華經は応身おうじん如來の所説、教主すでに優劣あり。法門において何ぞ淺深なからん。随つて対告衆たいごうしゆも法慧ほうえ・功德林くどくりん・金剛幢こんじやうどう等なり。永く二乗を雜まじえず。法華經は舍利弗等をもつて対告衆となす」と華嚴宗の難。法相宗のごときは、解深密經をもつて依憑えびようとなして難を加えて云く、「解深密經は文殊もんじゆ・觀音かんのん等をもつて対告衆となす。勝義生菩薩しやうぎしやうの領解りやうげには、一代を有う・空くう・中に詮ちゆんす。その中とは華嚴・法華・涅槃・深密等なり。法華經の信解しんげ品の五時の領解は四大声聞しだいしやうもんなり。菩薩と声聞と勝劣天地なり」と。

淨土宗のごときは道理を立てて云く、「我等われらは法華等の諸經を誹謗ひぼうするにあらず。彼等の諸經は正しやうには大人だいにんのため、傍ぼうには凡夫ほんぶのためなり。斷惑証理深の教にして、末代の我

等これを行ずるに、千人の中に一人も彼の機に当らず。在家の諸人多分は文字を見ず。また華嚴・法相等の名を聞かず、いわんや、その義を知らんや。浄土宗の意は、我等凡夫はただ口に任せて六字の名号を称うれば、現在には阿弥陀如来、二十五菩薩等を遣わして、身に影の随うがごとく、百重千重に行者を困遶してこれを守りたもう。故に現世には七難即滅七福即生し、乃至、臨終の時は必ず来迎ありて観音の蓮台に乗じ、須臾の間に浄土に至り、業に随つて蓮華開け、法華経を聞いて実相を覚る。何ぞ煩わしく穢土において余行を行じて何の詮かあらん。ただ万事を抛ちて一向に名号を称えよ」と云云。

禅宗等の人云く、「一代の聖教は月を指す指なり。天地日月等も汝等が妄心より出たり。十方の浄土も執心の影像なり。釈迦・十方の仏陀は汝が覚心の所変なり。文字に執する者は株を守る愚人なり。我が達磨大師は文字を立てず、方便を仮らず。一代聖教の外に仏、迦葉に印してこの法を伝う。法華経等はいまだ眞実を宣べず」と已上。

これらの諸宗の難一にあらず。如何が法華経の信心を壊らざるべしや。

答えて云く、法華經の行者は心中に、「四十余年、已今当、皆是眞実、依法不依人」等の
 文を存して、しかも外に語にこれを出さず。難に随つてこれを問うべし。そもそも所立
 の宗義は何れの經に依るやと。彼經を引かば、引くに随いてまたこれを尋ねよ。一代五十
 年の間の說の中に、法華經より先か、後か、同時なるか、また先後不定なるかと。もし先
 と答えば「未顯眞実」の文をもつてこれを責めよ。あえて彼の經の說相を尋ねることなか
 れ。後と答えば「当說」の文をもつてこれを責めよ。同時なりと答えば「今說」の文をも
 つてこれを責めよ。不定と答えば、不定の經は大部の經にあらず、一時一会の說にして、
 また物の数にあらず。その上、不定の經といえども三說を出でず。たとひ百千万の義を立
 つるといえども、四十余年等の文を載せて、虚妄と称せざるより外は用うべからず。仏の
 遺言に「不了義經に依らざれ」と云うが故なり。また智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて、
 徳を立て難ずといえども、法華・涅槃に違ふ人師においては用うべからず。「法に依りて
 人に依らざれ」の金言を仰ぐが故なり。

また法華經を信ずる愚者のために、二種の信心を立つ。一には、仏に就いて信を立て、二には、經に就いて信を立つ。

仏に就いて信を立つとは、權宗ごんしゅうの學者がくた來り難じて云わん。善導ぜんなん和尚しほうは三昧さんまい發得はつとくの人師にんし、本地ほんじは弥陀みだの化身けしんなり。慈恩じいん大師だいしは十一面觀音じゅういちめんくわんおんの化身けしんにして、また筆端しつぽんより舍利しゃりを雨ふらす。これらの諸人しよじんは皆彼々みなかれかれの經々に依りて皆証しやうじあり。何ぞ汝彼かの經に依らず、また彼の師かの義を用いざるや。

答えて曰く、汝聞け。一切の權宗ごんしゅうの大師だいし・先德せんたく並に舍利弗しゃりほつ・目連もくれん・普賢ふげん・文殊もんじゆ・觀音くわんおん乃至阿彌陀あみだ・藥師やくし・釈迦しやくかに如來にょらい、我等われらが前に集りて説きて云く、法華經ほふくわきんは汝等にんらの機きに叶わず、念仏等ねんぶつらの權經ごんきんの行ぎやうを修しゆして往生おんじやうを遂とげて、後に法華經ほふくわきんを覺さとれと。かくのごとき説を聞くといへども、あえて用うべからず。その故は四十余年の諸經しよきんには、法華經ほふくわきんの名字なみよつじを呼いばず。何れの処ところにか機きの堪かん・不堪ふかんを論ろんぜん。法華經ほふくわきんにおいては、多宝たぼう・釈迦しやくかに・十方じふぱうの諸佛しよぶつ、一処いっしょに集まりて撰せんび定ぢやうめて云く、「法ほふをして久くしく住ぢゆうせしむ」「如來にょらいの滅後めつごにおいて閻浮提えんぶだいの内

に広く流布せしめ、断絶せざらしむ」と。この外に今仏出で来りて、法華經を末代不相応と定めば、すでに法華經に違ふ。知んぬ、この仏は涅槃經に出す所の滅後の魔仏なり。これを信用すべからず。その已下の菩薩・声聞・比丘等はまた言論するに及ばず。これらは不審もなし。涅槃經に記すところの滅後の魔の所變の菩薩等なり。その故は、法華經の座は、三千大千世界の外、四百万億阿僧祇の世界なり。その中に充滿せる菩薩・二乘・人天・八部等、皆如来の告勅を蒙むり、各々所在の国土に法華經を弘むべきの由、これを願いぬ。善導等もし権者ならば、何ぞ竜樹・天親等のごとく、権教を弘めて後に法華經を弘めざるや。法華經の告勅の数に入らざるや。何ぞ仏のごとく権教を弘めて後に法華經を弘めざるや。もしこの義なくんば、たとい仏たりといえども、これを信ずべからず。今は法華經の中の仏を信ず。故に仏に就いて信を立つと云ふなり。

問うて云く、釈迦如来の所説を、他仏これを証するを實説と称せば、何ぞ阿弥陀經を信ぜざるや。

答えて云く、阿弥陀経においては、法華経のごとき証明なきが故にこれを信ぜず。

問うて云く、阿弥陀経を見るに、釈迦如来所説の一日七日の念仏を、六方の諸仏舌を出し三千を覆うて、これを証明せり。何ぞ証明なしと云うや。

答えて云く、阿弥陀経においては全く法華経のごとき証明なし。ただ釈迦一仏、舍利弗に向いて説きて言く、我一人阿弥陀経を説くのみにあらず、六方の諸仏舌を出し三千を覆うて阿弥陀経を説くと云うといえども、これらは釈迦一仏の説なり。あえて諸仏は来りたまわず。これらは権文なり。四十余年の間は教主も権仏の始覚の仏なり。仏権なるが故に所説もまた権なり。故に四十余年の権仏の説はこれを信ずべからず。今の法華・涅槃は久遠実成の円仏の実説なり。十界互具の実言なり。また多宝・十方の諸仏来りてこれを証明したもう、故にこれを信ずべし。阿弥陀経の説は無量義経の「未顕真實」の語に壞れ了んぬ。全く釈迦一仏の語にして、諸仏の証明にはあらざるなり。

二に、經に就いて信を立つとは、無量義經に四十余年の諸經を挙げて「いまだ眞實を顯さず」と云う。涅槃經に云く、「如来は虚妄の言なしといえども、もし衆生虚妄の説に因りて法利を得ると知れば、宜しきに随つて方便してすなわちためにこれを説きたもう」と。また云く、「了義經に依りて不了義經に依らざれ」と已上。かくのごときの文一にあらず。皆四十余年の自説の諸經を、虚妄・方便・不了義經・魔説と称す。これ皆人をしてその經を捨てて、法華・涅槃に入らしめんがためなり。しかるに何の恃みありて、妄語の經を留めて行儀を企て、得道を期するや。今權教の情執を捨てて、偏に実教を信ず。故に經に就いて信を立つと云うなり。

問うて云く、善導和尚も人に就いて信を立て、行に就いて信を立つ。何の差別あらんや。答えて云く、彼は阿弥陀經等の三部に依りてこれを立て、一代の經において了義經・不了義經を分たずしてこれを立つ。故に法華・涅槃の義に対して、これを難ずる時はその義壞れ了んぬ。

守護国家論

解説『日蓮宗事典』より

一篇。日蓮聖人著。正元元年（一二五九）撰述。三八歳。鎌倉における著述。真筆身延久遠寺曾存。本書は文応元年（一二六〇）撰述の『立正安国論』と共に、聖人初期の教学を代表する重要な著述である。

本書執筆の目的は源空浄土教の謗法を批判し、末法の時代における衆生救済と国土の安泰は法華経のみに限られることを明すにある。即ち聖人自ら序文に「中昔邪智の上人有て末代の愚人のために一切の宗義を破して選択集一卷を造る。（略）此悪義を破らんがために亦多くの書有り。（略）未だ選択集謗法の根源を顕さず。故に還て悪法の流布を増す。（略）予此事を歎く間一卷の書を造て選択集の謗法の縁起を顕し、名けて守護国家論と号す」（定八九・九〇頁）と記している。即ち聖人以前にも高弁らの高僧碩学によつて『選択集』批判の書が著されたが、それらは『選択集』の謗法の根源がどこにあるかを明らかにすることが出来なかつたから、かえつてその流布を助長する結果となつたので、ここに改めて破折するといふのである。

そして聖人は七科十六門の科文を立てた完備した構成のもとに、源空の『選択集』が正法を破壊し、衆生を悪道に導き入れ、国土に災難をもたらす謗法の悪書として告発し、徹底的に糾弾するのである。

聖人は第一に仏の経教には権実二教があり、法華経以外の諸経はすべて仏の方便権教であり、法華経のみが仏の出世本懷を明かした唯一眞実の教法であるとする。聖人は法華最勝眞実を証明するのに智顛の五時判を継承し、その理由として二乗作仏・久遠実成の説不説を挙げている。

第二に仏滅後の正像末三時における仏法の興廢を論じて、特に末法の時代に最も相応した教えは法華経のみであることが示される。

第三に『選択集』が正法たる法華経を誹謗する邪惡の書であることを同書の本文を引用して具体的に指摘する。

第四にこのような謗法者を対治しなければならぬ経文があるとして『仁王経』『大集経』『涅槃経』『金光明経』等を挙げ、謗法対治の任に当るべき者として国主を想定している。ここにおける主張は、そのまま『立正安国論』に強く主張される謗法対治策の論拠となるもので、本書が『安国論』の前提と見られるゆえんでもある。

第五に人間として生を享けながら、末代においては善知識¹¹よい宗教的指導者と眞実の法とに出会うことが極めて困難であることが述べられ、

第六に法華経信仰者は法華経の題目を唱えることにより、地獄・餓鬼・畜生の三惡道に墮ちることを免れることが出来、更に日本国は法華経と深い因縁を有する仏国であり、法華

経信仰者の住するこの娑婆世界こそが浄土であると説かれている。この第五・第六の二段において法華信仰の在り方が具体的に説示されている。

そして第七に「問いに随つて答う」の一段を設け、法華信仰者に対する諸宗の論難とそれへの対処の仕方が述べられている。

聖人が本書で明らかにしようとされた『選択集』の謗法の根源は、一に時機相應不相応の義によつて道俗を迷わす失、二に曇鸞・道綽・善導の中国浄土教三師と日本の源信らの先師に違背する失、三に法華真言の行者を群賊等に譬える失、四に法華経信仰者に疑惑を生ぜしめる失、五に実教を捨て権教に遷らしめる失の五にあるとし、法華経を「捨閉闍拋」せしめる源空を仏意違背の大謗法者であり、一切衆生の仏種を断ずる者と破折するのである。

このような聖人の源空浄土教に対する批判は、専ら法華経至上主義の教相的立場からなされておられ、法華経が末法相應の教えであることを権実判に立つて強調しているのである。本書の源空浄土教批判で注意されることは、曇鸞・道綽・善導の三人を肯定し、また源信の立場を念仏往生を説いた『往生要集』よりも法華一乘を明かした『一乗要決』にあつたとして、浄土教批判を源空一人に集中しているのであり、この点で『安国論』の浄土教批

判と異なるものがある。こうして源空浄土教が世を惑わす謗法の悪法であることを糾明する一方、聖人は末法救済の法として唱題成仏論を展開して法華経の題目の功德を強調し、題目受持を勧奨しているのである。これはやがて『観心本尊抄』における受持成仏論に結実するのである。さらに源空が穢土として否定した娑婆世界を、仏の常住不滅と国土の常住とを説く法華経本門寿命品に論拠を置いて、娑婆世界即寂光浄土と開顯して、この現実世界の価値を回復したのである。

本書の教学的立場が法華・真言未分であり、また源信を天台宗の先徳とするなどの点から、本書を佐渡配流後の本化別頭の教学と相對し、古くは『立正安国論』の下書、草案とし、最澄の『守護国界章』に倣ったもの等の見解があつた。

しかし本書の整然たる構成のもとに緻密な経論引証に基づいて展開されている浄土教批判は、『安国論』のそれとは全く様相を異にするのであり、また理念的とはいえ救済の論理が提示され、更に聖人独自の国家観・国土観が表明されていること等、本書は聖人教学上に重要な位置を占めるものである。